魔法少女なのは☆マギカ　～希望の魔法～

炙ＣＡＲＶＥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女なのは☆マギカ　～希望の魔法～

【Ｎコード】
Ｎ５２１５Ｖ

【作者名】
灸ＣＡＲＶＥ

【あらすじ】
「僕の名前はキュゥべえ！僕と契約して、魔法少女になってよ！」

魔法少女、はじめました。

…ちょっと違う、魔法少女。

平凡な小学生、高町なのは。
彼女はある日、フェレットもどきの『ユーノ』との出会いにより
魔法の力を授かる…というのが正史。

しかし、もしも別の存在がなのはを魔法少女にしていたら…？

『ジュエルシード事件』に巻き込まれるなのはを待ち受けるのは
残酷な現実、そして渦巻く二つの陰謀…

果たしてなのはは希望を勝ち取ることができるのか！？

皆が知っているなのはの物語とはちょっと違う彼女の魔法少女物語、
『魔法少女なのは☆マギカ』…はじまります。

プロローグ「ｍａｇｉａ」（前書き）

仮題：ＱＢ「なのはと契約するために海鳴まで来たのはいいけど」

ということで本来ＶＩＰに上げるつもりで書いたのはいいけど、
予想以上に本気になってしまったのでここに上げることにしました。
ネタかぶりとかあったら許してほむ。

ちなみにこの小説は、ほぼ登場人物の視点で書かれてます（プロローグ以外）
とりあえず、＝＝＝＝＝＝で視点変更と考えていただければ。

ちなみに、基本は劇場版に準拠してますが
時々第一期の場面もあるんでそこよろしく。

最後に。
この小説には『まどか』のキャラはほとんど出ませんよ＞＜

プロローグ「ｍａｇｉａ」

――――……（これは、あったかもしれない、過去の物語です…）……――――

「迂闊だったなぁ…」

そこは夜の森だった。
大きな影が小さな影を追いかけているように見えた。
大きな影は、まさに”影”そのもの。
黒い雲の塊が、まるで意思を持っているかのように小さな影を追いかけていた。
小さな影は、猫やリスに近い小動物のようなシルエットをしていた。
しかし、よく見ると地球のどの生物とも違うように見える。
真っ白な体色、瞼（まぶた）のない深紅・球形の目、耳から伸びた腕のような長い毛束、そして背中に真っ赤な模様。
何かのマスコットキャラクターを彷彿とさせる外見だった。
しかし、追いかけられているこの白い動物は、完全に無表情。
全てを達観しているとも、感情が存在しないとも感じられた。

「ここいらには魔女がいないから油断してはいたけど、
まさかロストロギアが紛れ込んでいるなんてね。
しかもなんだか他にもいるような気配じゃないか」

白い動物から”声”が発せられる。
しかし全く口が動いておらず、表情も変わらない。

「でもまぁ、これならこれで作戦も立てられるかな。
こいつらと戦うっていう理由を提示すれば魔法少女の契約もしやすいしね。
さてと、とりあえずはこいつをどうにか撒こうかな…」

ふたつの影はまだ動いているが、少しずつ差が縮まっているように見えた。

「撒けるような相手でもなかったみたいだね」

黒い影が迫る。
絶体絶命の状況でも、小さき白い動物は表情を変えない。

「しかし、初めての場所を訪れていきなり殺されるなんて」

大きな影は、もう追いついていた。
そこから鋭くとがった触手が勢いよく伸び、白い獲物を…

「わけがわからないよ」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……夢オチ……？」

第一章「夢の中であった、みたいなの」（前書き）

第一章。

ぶっちゃけまどかの夢のシーンは
なのはのオマージュとしか思えない。

第一章「夢の中であった、みたいなの」

わたし…高町なのは。
私立聖？大附属小学校の三年生。

「おはよー・・・」

「おはよう、なのは。ちゃんと一人で起きられたな」

「あ、なのは、おはよう。これお願いね」

「お兄ちゃんお姉ちゃんおはよーっ、朝ごはんだよ！」

「おはよっ」

「なのは、おはよう」

喫茶店のマスターのお父さんとお菓子職人のお母さん、
剣術家のお兄ちゃんに高校生のお姉ちゃん。
わたしは、五人家族の末っ子さんです。

「学校行ってくるねー」

いつもの時間に、スクールバスに乗ります。

「なのはちゃーん！」

「なのはーっ、こっちこっちー！」

月村すずかちゃんと、アリサ・バニングスちゃん。
一年生のころからずっと同じクラスで、今は同じ塾にも通ってる…
わたしの友達。

「えー、この前調べてもらった通り……」

「……」

「将来、どんなお仕事に就きたいのか……」

「……」

学校の授業。
わたしの未来ビジョンはあまり決まっていない。もちろん、お店を継ぐことも考えているけど…
わたし、特技も取り柄も何もないからまだわからない。
だけどもっと他に未来の夢が、あるようなないような…

「ばかちーん！アンタ、理数の成績はこのあたしよりいーじゃないの！
それで取り柄がないとかどの口が言うわけ！？」

「そうだよ、なのはちゃんにしかできないこと、きっとあるよ！」

「うー…だってなのは、文系も体育も苦手だし～」

自分にできること、自分にしかできないこと…か。

学校の授業も終わって、三人で歩いて帰宅。
うちの学校、なぜかバスが午前中にしか運転していなくて（汗

「あ、こっちこっち。ここを通ると塾に行くのに近道なんだ。ちょっと道悪いけどね」

アリサちゃんに案内された道は林の中。当然初めての道だった。
でも、どこかでこの道を見た気が…

あ、…この場所、夕べの夢の中で、あったような…。

「大丈夫？」

「なのはー？」

「あっ…ううん、なんでもない。ごめんごめん」

うっかり足を止めちゃった、ちょっとしょんぼり。

とりあえず早く塾に行かないと。

どうせ、夢は夢だし…。

「はい、それではーこの問題の答えを…ぁじゃあ２９番高町さん」

「はい、５／４２です」

何事もなく塾も終わり、家に着いて…。
いつも通りの夕食。いつも通りの就寝。
それにしても、なんで夢のはずなのに…こんなにはっきり覚えているんだろう？
まあいいか、寝れば夢なんてすぐに忘れるし…

まさか、夢が本当のことだったなんて、あるわけないよね。

ピィィィィィ――――――――――――――――――――――――――――――……

……

「！？！？」

突然の耳鳴り。
あわてて目を覚ますけど、何これ？ただの耳鳴りじゃない…？

――…聞こえる？……――…僕の声が……――…聞こえる？……――

耳鳴りに重なって、声が聞こえてきた。

「（！！……夕べの夢と、同じ声…？）」

――…僕の声が聞こえる君……――…お願い、僕に力を貸して……――

「（まさか、夕べの…追いかけられていた方がしゃべってるのかも…）」

わたしは、直感的にこう思った。
それと、たとえ夢で何も言っていなくても、あの動物が話しかけてきていると思ったかもしれない。

――…お願い、早く……――…僕のところへ……――

ぷつんっ。
急に耳鳴りが消えて、声もしなくなった。

どうしよう…
わたしは、何となく…行かなきゃならない感じがする。
でも…別のわたしが、行ってはならないとささやいている気も…。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

わたしは普段着になって、夜の町を走っていた。
今行かなきゃ、きっと後悔すると思ったから。
今もまだ、これでよかったのかな…と迷っているけど、足が止まらない。
もう後戻りできないような気がしたから…

ピィィィィィ――――――――――――――――――………
………

「（！！…またこの音…）」

ふたたび耳鳴り。
でも、さっきよりもっと耳障りで、おもわず耳をふさぎ、目もつぶってしまう。
耳鳴りが止んで、目を開ける。

なんだか、周りの景色が少し違っているような…

（ドカァァァァーーーーーーーン…）

突然、前の方から建物が”壊される”ような音がした。

「ふえぇっ！？…なになに、一体何？」

びっくりして思わず声を上げてしまう。

よく見ると、ずっと前の方で煙が上がっている。

すると、そこから小さな影が飛び出してきました…

「（あ…あれは、まさか夢の？）」

――…来てくれたんだね、『高町なのは』…――

「（あれ…？なんでわたしの名前を！？）」

「まあそんなことはどうでもいいじゃないか」

今度ははっきりと、耳から声が聞こえたの。

いつの間にか、小さな白い動物が目の前に来ています。

猫…なのかな？でも、何だかいろいろとおかしいけど…。

というか、心の声が聞かれてるー！？

「とりあえず、あいつが来る前にどこかに隠れよう」

「あいつ？…ってちょっと待ってー！」

いつのまにか猫？が走り去っていってるよー＞＜

追いかけないと…

「とりあえず、ここならしばらくは安全そうだね」
脇道にそれたところであの子が止まって、
わたしも何とか追いついて、ふぅ…と息をつく。
「さて、キミに来てもらったのには訳があるんだ」
あの子がわたしの前に出て、胸を張って（？）言います。
何となく相手のペースにのせられているような…

「僕の名前はキュゥべえ！僕と契約して、魔法少女になってよ！」

「ふぇ…？」

わたしは、何だかアニメかなにかで出てきそうな言葉を聞いて、しばらく呆然。
よく見るとこの動物…キュゥべえだっけ、
魔法少女もののマスコットキャラのようにも見えるけど…
まさか本当に…？
「やばい、奴が来る！」
突然キュゥべえが叫ぶ。するとすぐに、それが来たの。

「（あれは…やっぱり夢の…）」

たしかにあれは、夢の中でキュゥべえを追いかけていた黒い影。
まっ黒な雲のかたまりに光る目玉が2つ付いているイメージ。
影はこっちを見ると、いきなり襲いかかってきた！

「早く逃げよう、このままじゃやられる！」

「ちょ、待ってってばー！」

「ぅ、その…何が何だかよくわからないけど、いったい何なの？何が起きてるの？」

キュゥべえといっしょに走りながら、わたしは状況が分からず質問していた。

「キミには資質がある。魔法少女としてのね」

「…？」

「あいつは『ロストロギア』と呼ばれる、とにかくやばい連中さ。
僕はある目的のためにここではない世界から来て、突然襲われた。
正直、僕一人の力ではどうにもならないかもしれない。
だから資質を持った人を探していて、君を見つけた」

わたしに…魔法少女の…素質？

「これは僕たちの世界での決まりでね、
僕と契約した時には、キミの願いを一つ叶えてあげられる。」
「願い？今は特にないけど…」
「何だって構わない。ごちそうが欲しいとか、お金が欲しいとか、
…君ならば、世界征服でも可能だ。
だから僕に願うんだ、自分の望むことを。
そのあとなのはには魔法少女として、あいつらと戦ってもらう。
魔法の力を使ってね」
「魔法の力…戦う…」
やっぱりわたし、あれと戦うんだ…。
しかも、”あいつら”ってことは、あんなのが他にも…？
「ウォォォォォォーーーッ…」
突然上の方から、雄たけびみたいな声が聞こえた。
「っ！？」
上を見ると、さっきの黒い雲がそこにあった。
とっさに電柱のそばにかけよる。
（ドカァァァァーーーーーーーン…）
次の瞬間、”すぐ横”でさっきのような壊れる音がした。
見ると、黒い雲が床にめり込んでいる。

「願い事を決めるんだ！早く！」

「願いとか、そんな場合じゃないでしょう？」

「いや、願いを叶えなくては魔法少女は生み出せないことになっている」

願い…か。
深呼吸して、言いたいことをまとめる。
そのあと、わたしは自分の考えを正直に言った。

「わたし、”願い”は自分の力で叶えるものだと思っている。
そうじゃなきゃ、叶った時の喜びも薄くなっちゃうしね。
だいたい、こんな状況で自分自身の願いなんか思いつかないよ」

「……」

そう、願いなんて無い。
強いて言うなら、今までの日々を壊されたくない…かな。

「だからわたしは、力がほしい。
あいつらをやっつけて、運命を切り開くための力がほしい！」

「…なのはの”願い”は、これでいいんだね？」

「うん！」

わたしは迷わなかった。
これからきっと辛い出来事が待っていると思うけど、

その先には、必ず希望があると思ったから。
それに、自分にしかできないこと、見つけたような気がしたから…
「…契約は、成立だ」

キュゥべえの両耳の毛が伸びて、わたしに触れる。
「うっ…！」
「さあ、受け入れるといい。それが君の運命だ」
胸が苦しい…！痛い…！
これが、魔法少女になるってこと…
あれ、痛みが、だんだん上の方、体の外へ…？

気がつくと、痛みは止んでいた。
下を見ると、わたしの胸の近くに桜色の宝石が浮かんでいる…
「これはソウルジェム。魔法少女の証であり、力の源だ。
おめでとうなのは、君は晴れて『魔法少女なのは』になったよ」
魔法少女…なのは…。

何だか少し、体に違和感があるような…

「来た！」

いつの間にか、めり込んでいた黒い雲がこっちを睨んでいる。

「落ち着いてイメージして。君の力を使うための武器の姿、そして君の身を守る強い衣服の姿を」

「そんな、急に言われても…えと、え…っと…」

いきなり言われて戸惑いつつも、少しずつイメージが完成していく。

「とりあえずこれで！」

わたしの体を、桜色の光が包む…

「ふぅ…、…？ふぇぇ！？」

「うん、上出来だ」

気がつくと、わたしの姿が変わっていた。
胸に宝石をあしらった白い魔法の服と、
金銀にまぶしく輝く魔法の杖。イメージのままだ…。

「来るよ！跳んで！」

キュゥべぇが叫ぶ。
よくわからないけど、とりあえず跳んでみた。
と思った時には、わたしの”ずっと下の地面”を、黒い雲から出た触手が貫いていた！？

「ふぇぇぇぇーっ！？！？」

ちょっと待って、なんでわたしこんなに高くジャンプしてるの！？
下に町が広がってるよー…、キュゥべえともだいぶ離れちゃったし…

「（なのは、聞こえる？テレパシーならこの距離でも通じるよね）」

「（あ…うん、聞こえる）」

「（今の君の能力は、ほぼ君のイメージに合致している。
…魔法少女の固有能力は、願いと密接に関係しているんだ。
傷を治す願いなら回復の魔法、想いを通す願いなら貫通の魔法…といった具合にね。
君は戦う力のみを願いにしたね？だから君の能力は、君の想像する”戦う力”そのものさ。
さあ、自分が戦っている姿を心に描いて。その通りに動くんだ）」

「（急に言われてもー…）」

こうしている間に、黒い雲が地面から出てきて、こっちに飛んできた！

わたしをめがけて触手が勢いよく襲ってくる…！

わたしの…戦う…魔法少女のイメージ…

空を飛びまわり、光輝くビームで敵を貫き、飲み込む…

「これだ！」

触手がすぐそこまで迫った時、イメージが固まった。
次の瞬間には、わたしは身をひるがえして攻撃を避けていた！

「ウォォォォッォォォォーーーーーーッ」

黒い雲が怒った！？
と思うと、狂ったように触手を伸ばしまくってきた！

「うわっ！？はっ、ひっ、ふぇっ！？」

必死に避け続けるも、まだ空を飛ぶための感覚がつかみ切れていない。
あれ…いつのまにか、地上に追い詰められてる！？

「ウォォォォーーーーーッ」

しまった、もう足がついちゃってる！
黒い雲が上から猛スピードで突進してくる、よけられない！
どうすれば…そうだ！

「えーっと、もうとにかくバリアー！」

自分のイメージした通りに右手をかざして念を込めると…魔法の壁が現れた！
敵は一瞬はじかれたけど、すぐに触手をいっぱい出してバリアーを破ろうとする。
チャンスは今しかない！
わたしはすかさず左手の杖を黒い雲に向ける！

「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！」

魔法の杖から、桜色に輝く光の奔流がほとばしった！

気がつくと、黒い雲はもういない。
代わりに、透き通った青い宝石が数個落ちていた。

「これがあいつの本体のようだね。
　それにしても流石だよ、あれを一撃で倒すとは」

これが本体か…。
こんなのがまだまだ沢山いるかもしれないなんて…

「悪いが持っていてくれるかい？僕にはどうやら持ち運べないようだし、
もしかするとまた暴れだす可能性もあるからね」
いやいや、わたしが持ってる間に暴れられても！
「ところで、君のソウルジェムを見てくれ。こいつをどう思う？
…少し濁っているよね？」
うわ、急に話をそらしたよ！
でも本当だ、このきれいな桜色の宝石、ほんの少し黒ずんでいるような…
「君たち魔法少女は、魔法を使うほどこの宝石が穢れていく。
定期的に浄化しなければならないんだ」
「浄化…どうやって浄化するの？」
いつのまにか変身が解けていたことに気づくも、あまり気にならなかった。
話について行くのが精いっぱいだったんだもん＞＜
「浄化には専用のアイテムが必要なんだけど、今の僕たちにはあまり簡単に手に入るような代物じゃない。
…どうやら、今手に入れた宝石があれば穢れを遅らせることができるようだけど」
「ふぇ、そうなの？」

「…君のソウルジェム、本来あれほどの魔力を使えばもっと濁っている筈だった。
でも今はほとんど濁っていない。
それに、僕にはその青い宝石から何か力の波動が出ているように感じられる。
多分その波動がソウルジェムの穢れを抑えているんだろうね。
まあ、そうと決まったわけじゃない。君が寝ている間に僕が様子を見ておくよ」

ぼんやり聞いていたけど、さらっと凄いことを言っていた。

「あ、うん。よろしく…って…寝てる間？うちに来るの！？」

「安心してくれ、魔法少女以外には僕の姿は見えないから」

そーじゃなくてー！
これからキュゥべえと一緒に暮らすことになるのー！？

「それより、ここにいると色々まずいんじゃないかな」

キュゥべぇに言われてあたりを見回すと、
電柱が倒れてたり、塀が欠けてたり、アスファルトが割れてたり……
もしかして、これってすごく大変なこと…だよね？

「……と、とりあえず、ごめんなさーい！」

一目散に家まで逃げるわたし。
…、やっぱりキュゥべえも付いてきてるよぉ…。
まあ仕方ないのかな…？

「（全く、しばらくはこいつらの処理に追われることになるな。
　この調子で集めていけば、彼女のソウルジェムもほとんど濁らなくなるだろうね…。
　まあ、それもこのロストロギア共がいなくなるまでだ、そうしたらまた通常営業に戻れる。
　それにしても、彼女の素質は大したものだ…どうも多くの因果の中心になりうるみたいだね。
　他の魔法少女だったらすぐにこいつらに殺されていただろう。）
」
　邪魔者の処理…期待してるよ、なのは）」

こうして、なのはとキュゥべえの波乱の魔法少女生活が始まったのでした…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

月夜。
ビルの頂上から街を見渡す。
ここに…

「第９７管理外世界、現地名称：地球＝ｅａｒｔｈ…
母さんの探し物、『ジュエルシード』…ここにある」

「Ｙｅｓ　ｓｉｒ」

やっとこの世界を見つけた…！
必ず、成し遂げてみせる！

第二章「こんなの絶対おかしいの」（前書き）

第二章。

プロローグとエピローグを除くと
屈指の短さだと思う。

まだ普通のリリカルなのは的雰囲気。
QBとかどうでもよくなってきてぬぇ？

第二章「こんなの絶対おかしいの」

あの大変な出会いの後、夜に外出しちゃったから
お父さんたちに怒られちゃった。
でもそのほかには特になんともなく、さっさと寝ました。
明くる朝、わたしは普段通りに学校に行きました…
いや、普段通りじゃなかったかな？

「（ねえキュゥべえ、聞こえる？）」

「（ああ、聞こえるよ）」

そうです、キュゥべえが学校についてきちゃってます…。

「（昨日のこと、まだ信じられないの）」

「（魔法少女云々のことかい？）」

ちなみに今は授業中。よいこは真似しないでね？

「（それもあるけど、初めてなのにちゃんと戦えていたことが…）」

そう。わたしは戦ったことなんて、精々アリサちゃんとの小さなケンカくらいしかないの。
ましてや魔法を使ったことなんてぜんぜん無いのに…

「（魔法少女となった者は、多くの場合即戦力になるしかない。
だから、変身中はある程度頭脳が強化されていると考えてくれ。

そうでなければ、初めての戦いであんな立ち回りなんてできないよ）」

頭脳が、強化…。

もしかして魔法少女って、わたしの思う以上にやばいものなのかも？

「（でも、昨日のあれはやばかった。

君ほどの素質がなければ返り討ちにされていただろうね）」

返り討ちって…。

昨日のことを思い出してみると、本当に命がけの戦いだった。

うぅ、背筋に寒気が…

「（そういえば昨日の黒いのって、何なの？

たしか『ロストロギア』って言ってたけど…）」

「（『ロストロギア』というのは、あれの名前ではない。

僕が違う世界から来たという話はしたね？

その世界のほかにも、この次元空間にはいくつもの世界がある。

その中には、文明が暴走したせいで破滅の道をたどったところも多い。

こういった世界が残した、危険な技術の遺産…それらをひっくるめて『ロストロギア』という。

危ないから野放しにしてはいけないんだよ）」

えー…っと、違う世界が残した、やばいもの…かな？

「（もちろん、昨日のあれも数あるロストロギアの一種類に過ぎない。

名前はあるんだろうけど、それだって分からない。情報がなさ

すぎるんだ）」

「（…え、じゃあ…キュゥべえはあれについてはほとんど知らないの？）」

「（ああ。分かっていることと言えば、
青い宝石が本体であることと、ちょっとしたきっかけで暴走すること…
それと、ソウルジェムの濁りを抑制する効果があることくらいだ。
おととい襲われた時に分かったことだけどね）」

そういえば、あのときの夢って本当なのかな？
本当だとしたら…キュゥべえ殺されてなかったっけ！？

「（なのはにはあいつらと戦ってほしいんだけど、本題はあいつらを全部やっつけた後だ。
この町にはいないようだが、ちょっと離れると結構な数がいる。
これこそ、魔法少女が真に戦うべき相手だ）」

さっきのことを深く考える暇もなく、キュゥべえは新事実を突き付ける。
話についていけるかどうか不安になってくる…。

「（絶望や呪いの感情から生まれる化け物『魔女』。人間を呪い、心に語りかけて自殺に追い込む。
これを倒すのが僕が地球に来たほんとうの目的。ロストロギアは単なるとばっちりさ）」

人を自殺させる化け物、魔女かぁ。

ふぇー、なんだか大変なことになってるような…。殺されちゃったりしないかな…？

「（怖いかい？でも大丈夫。しつこいようだが、君はかなりの素質を持っている。
　昨日のだってあっという間に倒したじゃないか。
　だからロストロギアだろうが魔女だろうが勝てるって）」

ロストロギア…魔女…
素質があるって言われても、怖いものは怖いよー！

とまあこんな感じの授業は終わり（先生ごめんなさーい）
家に帰ります。

「じゃ、あたしとすずかはおけいこの日だから！」

「いってきます」

「うん、おけいこ頑張って！」

というわけで今回は一人で帰り…っと、
やっぱりキュゥべぇが一緒です…。

「キュゥべえ、昨日のロストロギアの話なんだけど…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！！！！！

鋭い気配。森の方から…？

「なのは、ロストロギアの気配だ！急ごう！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！！！！！！

ジュエルシードの反応！森の方向！
気を引き締めて森へ急ぐ！

森では、黒い豹のような怪物が子猫に飛びかかっていた。
恐らくジュエルシードに憑依でもされているのだろう。
私はすかさず割って入り、シールドでとりあえず猫を守る。

「バルディッシュ！」

「Ｇｅｔ　ｓｅｔ」

右手に持つのは小さな私の愛機、バルディッシュ。
私の意志を汲み、黄金色の光を貸してくれる。
私がそれを投げると、大地を衝撃波が駆ける。
そして、命中。

「グォォォォォォォォッ！！！！！」

怪物は耐え切れずに吹っ飛んだようだった。
一気に畳みかける！

「Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ，　ｓｅｔ　ｕｐ」

いつものように、私の体を黄金色の光が包む…

黒き死神をモチーフとした、機動性重視のバリアジャケット。
そして、バルディッシュも本来の姿であるアックスフォームとなる。
セットアップ完了。

「Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ」

「ファイア！」

小型の魔法弾を生成し次々に撃ち込むも、
流石は豹というべきか、機敏にこちらの攻撃をかわし続ける。

「チッ！」

避けられながらも、魔法弾で相手を牽制。

動きを読み切り、一気に当てる！

…爆発音が響く。
わたしは一旦距離を置き、敵の様子を確かめる。
黒豹はまだ生きていた。
奴は跳びあがると、翼を生やしてそのまま舞い上がる！

「はぁっ！」

しかしスピードではこちらの方が上だ。
すぐに追いついて、バルディッシュで敵の片翼を断ち切る。
敵は墜落した…と思ったが、切り口からまた新たに翼が生えてきた。
やはり本体を叩かないと倒せないか…。

「！！」

殺気を感じて後ろを振り向くと、
切り取った翼が数匹の黒い蛇となって襲いかかってきた！

「くっ！」

一瞬驚くも、バルディッシュの電撃で蛇を消去。
上を確認すると黒豹が襲いかかってくる。
カウンターで仕留めよう…！

「てええええええぇぇぇぇぇーーーーーーーーーッ！！！！！！」

…………！？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「なのは、僕が追いつくまで待っていなくていいのかい？」

「待てない！」

今も人や動物がひどい目にあっているかもしれない！

「キュゥべえ、これから努力して経験積んでくよ。
だから教えて、どうすればいいか…！」

「…分かった、できる限りのアドバイスをしよう」

「うん！」

森につくと、何だか雷がたくさん炸裂している！
あのロストロギアの力なのかな？
どっちにしろ、早く止めないと！

「変身っ！」

わたしはソウルジェムに念を込め、変身する。
学校の制服をモデルにした、天使モチーフの服。

昔テレビで見た魔法使いのをイメージした杖！
変身完了！
わたしは空高く跳びあがると、下に翼の生えた黒豹のようなのが見えた。

「（あれもあのロストロギア？前と違うけど…）」

「（いや、前の奴と同じだ。この星の動物に憑依でもしているのだろう。
いずれにせよ、今はこっちに気づいていない。一気にいこう！）」

黒豹は下に向かって飛んでいる。
誰かが襲われている！？早くやっつけなくちゃ！

「てええええええぇぇぇぇぇーーーーーーーーーッ！！！！！！！」

杖を構えて、全速力で上から突進！…命中！
黒豹を地面に押さえつける！

「いいぞ、なのは！このままやっつけて！」

「おっけー！はぁぁぁぁぁ…！」

トドメのために力をためる…。
しかし、もう少しで発射というタイミングで黒豹が脱出した！
しまった、逃がしちゃう…！

「Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ！」

「ジュエルシード、封印ッ！」

突然上からの声。
見上げると、黒い服を着た女の子が黄金色に輝く刃を黒豹に振りおろしていた！

「グォォォォ……！」

黒豹は空中で爆発していた。
後に残るのは、本体である青い宝石のみ。

しばらく呆然と眺めるわたし。
黒い女の子も、こっちを見つめ返す。
ぴっちりとした黒い服に、黒いマント、きれいな金髪…

すこしの沈黙。
その後、あの子はあのロストロギアを手に取ろうとする。

「あ、あの、待って！」

とっさに叫んじゃったけど…

「……！」

あの子はこっちをきっと見据えると、自分の周りに雷の弾を構えた！
まさか、撃ってくるの！？
…どうやら、警戒してるだけみたい。
空に上がり、あの子に話しかけてみる。

「あの、あなたもそれ…、探してるの？」

「それ以上近づかないで」

「いや、あの…お話したいだけなの。
あなたも魔法少女なの？とか、なんで集めているの？とか…」

あの子は相変わらず鋭い目つき。周りで雷が光っている。
怖いけど、もう少し近づいてみよう。
もっと話を聞かなきゃ…

「Ｆｉｒｅ！」

うわ、本当に撃ってきた！
とっさに上昇してかわす。すると、後ろから風の音が！
回り込まれた！？

「Ｓｃｙｔｈｅ　Ｓｌａｓｈ」

振り向くと、あの子が輝く黒い鎌で斬りかかってきている！
…鎌から金色に光る刃が！？

「……ッ！！」

これは避けられない！
わたしはバリアも張れないまま、魔法の杖で黒い鎌を防ぐ。

「待って！わたし、戦うつもりなんて…ない！」

「だったら…私とジュエルシードに関わらないで」

「だから、それは…」

とっても危ないものなの、と言おうとして、迷った。
そもそもわたし、これについてほとんど何も知らない。
名前…ジュエルシードだっけ、これだってさっきこの子が言っていただけ。
そんなわたしが、一体何を言えるの……？

一瞬の迷いが、体から力を抜いてしまった。
鎌の力に押し切られ、杖ごと遠くに吹き飛ばされる。

「Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ！」

さっきから違う人の声…、外国人の男の人？
あの子の武器がしゃべってるのかな…
ってそんな場合じゃない！
あの鎌に付いていた光の刃が、鎌から離れて飛んできた！

「Ｓａｂｅｒ　Ｅｘｐｌｏｄｅ」

何とかバリアで向かってくる刃を防ぐ。

…！？刃が爆発した！？

「ひゃーーーーーーーーーーっ！！」

これには耐えられず、墜落していくわたし。
あの子がこっちを見据えて、雷の弾を構えている…

「…ごめんね」

そう聞こえたような気がした。
次の瞬間には、わたしはまともに弾を受けていた…

地面に打ちつけられ、もうろうとする意識。

「Ｉｎｔｅｒｎａｒｉｚｅ　Ｎｏ．１６」

「今度は、手加減できないかもしれない。ジュエルシードは、諦めて」

あの子はこれだけ言い残すと、
どこへともなく飛び去って行った…

「なのは、大丈夫かい？」

「キュゥべぇ…んくっ、何とか」

すぐにキュゥべえが駆けつけてくる。

何とか立ち上がって、辺りを見回すと…

「みゃぁ…」

黒豹がめり込んでいた地面に、一匹の黒猫がいた。

やっぱり、ジュエルシードにとりつかれてたんだ…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「広域サーチ、第四区画終了っと」

摩天楼の上では、私の使い魔にして大切な仲間…アルフが、ジュエルシードを探してくれている。

アルフに向けて、通信開始…。

「アルフ、お疲れ様」

「フェイト…！」

「遅くまでごめんね…そっちは、どう？」

「発動前のを、さっき一個見つけたよ。
今夜中には、この辺一帯をサーチできると思うけど？」

アルフは、野良犬から使い魔になったばかりのころから私の友達だった。
今も、私の目的のために一生懸命協力してくれている。
使い魔だから、と言われればそれまでだけど…

「ありがとう…私は、夕方に封印した一つだけ」

「そう…」

アルフも頑張ってくれているのに、
私自身があまり集められていない。
後ろめたい気もする…。

「それにしても、フェイトとぶつかったこの二人。
まさか管理局じゃないよね？
今んとこ、追われるようなことはしてない筈だし」

「それはないと思う。
だって…ミッド式魔法とは全然違う感じだった。
この世界独自の魔法みたいなものでもあるんじゃないかな？
確か『魔法少女』って言ってたし。」

そう、確かにあの子の使う魔法は何か違っていた。
デバイスも何も言わないし、魔法陣は…見たことのない形状だった。
とりあえず…非殺傷設定にしておいたから、死んではいないと思うけど…。

「そうか…、まあいざとなったら、あたしがそいつらぶちのめしちゃえっ！
フェイトはっ、心配いらないからね～？」
「ありがとう…アルフ」
私も、がんばらなくちゃ。母さんのために…

＝＝＝

「キュゥべえは、あの子のこと知ってたの？」
家に帰って、聞きたいことをとりあえず聞いてみた。
ちなみに家族にはさっきの戦いで負った傷について聞かれたけど、ちょっと派手に転んだと言ってあります（てへ）
「いや…あれは恐らく、僕たちが言うところの魔法少女ではない。別系統の魔法を使っていた」
「別系統…違う種類の魔法ってこと？」
「ああ、きっと僕たちの世界とも違うところで栄えているやつだ。ソウルジェムも持っていない」
いろんな世界、いろんな魔法があるんだ…。

「ジュエルシード集めをしてると、
　あの子とまた、ぶつかっちゃうのかな…？」
きっと、わたしと同い年くらい。
ふしぎなほどに、怖くは無くて。だけど何だか、悲しいような…。
「きっとまた戦うことになる。
　おそらく、良からぬことにでも使うつもりだ。注意しておかないと」
また戦うことになる…。
悪い人という感じはしなかったのに、なんで話ができないんだろう…
こんなの絶対おかしいよ…！

「（やれやれ、ミッド式魔法を見たときはどうしようかと思ったよ。
ジュエルシードとやらを奪っただけだったから、
管理局ではないだろうけど…。
局に見つかったらそれこそ詰みのようなものだからね。
それにしても、本当に彼女程の素質がなかったら危なかったよ。
幸い、なのはのジェムもまだほとんど濁っていない。
うまくどこかに追いやれればいいけど、とりあえずは現状維持かな）」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

次の日の朝。私は交差点を渡っていた。
するとどこからともなく聞こえてくる会話。

「ねえママ、今日のお昼ごはん、なーに？」

「んー？何にしようねぇ」

「はいはいっ、んじゃあオムライスー！おいしいんだもん」

「またぁ？そうね…まあ、いっか♪」

……。
なんだか、寂しくなる。

「はい、お待たせ」

「あ、ママ！ジャムいっぱい入ってる？」

「うふふ、もちろん」

「わーい、ママ大好きー！」

母さん……。

第三章「本当の気持ちと向きあえるの？」（前書き）

第三章。

徐々に正史とずれていく物語。

言いたいことはこれだけか。

第三章「本当の気持ちと向きあえるの？」

「はい、じゃあ僕を撃ってごらん」

わたしは、これからの戦いに備えて早朝特訓をしています。
もっと強くならないと、キュゥべえの役にも立てないかもしれないからね。
というわけで、キュゥべえの体当たりを避けながらパチンコで撃つ訓練。
なかなか当たらない…。
でも、少しずつキュゥべえを追い詰めていく。そして、

「命中！やったね！」

「見事だなのは。それにしても驚いたよ、自主的に特訓するなんて」

「だって、いつまでも弱いままでもいられないし…」

「僕と契約した子の中でも、こうして訓練する子は君くらいなものさ。
僕の授ける魔法の力は、強い自分をイメージするだけで十分発揮できるものなんだ。
だから普通は特訓なんてせず、狩りに専念するものだけど…
やっぱり、あの黒い服の女の子は強かったからかな」

強い自分…か。
もしもまたあの子と戦うことになったら、
絶対に勝つつもりでいかないといけないのかな…。
…というより、すごく気になることが！

「わたしの他にもキュゥべえと契約した人っているの！？」

「それこそ沢山いるさ、世界中にね。
魔女の話はしたね？僕はさまざまな女の子と契約して、魔女を狩ってもらってきたのさ」

「そっかー…、そういえばキュゥべえと契約すると、
何でも願い事を叶えてくれるんだよね？」

「何でも…とはいかないかもしれないね。契約者の資質によるんだ。
でも、大抵のことなら誰の願いでも叶えられるよ。
実際、君との時みたいに互いがピンチの状況で契約した例は極稀だ。
女の子が困っているときに僕が現れて契約、という流れが大半だね」

なるほど…。他のみんなは、どんな願い事をしたんだろう？
今思うと、特に願いがなかった自分がちょっと損な気がするなぁ。
そして契約した子は、人を殺す魔女と戦うことになる。
でも、ここには魔女がいない。代わりに、ジュエルシードが…。

「ここには最近魔女が出ないから来てなかった。
でもなのはの様子を見ると、あのジュエルシードも昔からあったわけではないんだろう？
ならさっさと倒さないと。あの怪しい黒い子もね」

あの黒服の子。
素直にやっつけちゃ、いけない気もするけど…

「なのはちゃん、今日も来れないの？」

「別にいいわよ、大事な用事なんでしょう？」

「うん、ごめんね…」

「謝るくらいなら事情くらい聞かせてほしいわよ！」

「アリサちゃんっ！」

「ごめんね…」

最近ジュエルシードのことでいっぱいいっぱいで、
アリサちゃん達ともほとんど遊んでない。
やっぱり心配かけてるよね…

「じゃあねっ！ふんっ」

「ぁ…ごめんねなのはちゃんっ、また明日」

「うん…」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝

「こりゃぁ…強制的に暴れさせる気だね」

街の人たちがあぶない！

…と思ったら、いつの間にか周りに誰もいなくなっている。

何だか景色の色合いが少し違うような…。

「みんなを…逃がしてくれてるのかな？」

「それより今は、あいつらより先にジュエルシードの確保だ！

彼女の手に渡ったら、何をしでかすかわからない！」

「う、うん…変身っ！」

何か釈然としないけど、とりあえず行かないと！

…見つけた！何だか今にも動き出しそう！

一気にビーム砲で動きを止めなきゃ！

「はぁぁぁぁぁぁ……っ！」

＝＝＝

「あっちも気づいてる…フェイト！」
あの子…何も知らないようだけど、
邪魔をするなら容赦しない！
「Ｇｒａｖｅ　Ｆｏｒｍ，　ｇｅｔ　ｓｅｔ？」
私もジュエルシードに向かう。
やはり相手も来ていた…先に封印しなくては！
「Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｍａｓｈｅｒ！」

＝＝＝

ついノリであっちに合わせて叫んじゃった…（＾＾；
いや、そんなことより宝石は！？…よかった、ちゃんと止まってる。

「やった！なのは、早く確保を！」

「させるかよぉぉぉ！！！」

後ろでキュゥべえが何かに襲われてる！この子の仲間かな？
女の人のようだけど…大きな犬に変身した！？
赤っぽいオレンジの毛色、おでこに深紅の宝石…！
あ、キュゥべえ余裕で避けれてる。なら安心かな。

「あいつの邪魔は…させないよ！」

無言で見つめあうわたしたち。
わたしは意を決して踏み出す！

「こないだは、自己紹介できなかったけど…わたし、なのは。高町なのは！
私立聖？大附属小学校三年生！」

「Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ！」

あの子の持っている…斧？前は鎌だったはずだけど…、あれ？鎌に変形した。

そうか、そういう仕組み…じゃなくて！やっぱりあの子、戦う気満々だよぉ…

「（ジュエルシードは諦めて、って言ったはずだよ）」

声の届く距離じゃないけど、テレパシーは通じるみたい。

「（それを言うなら、わたしの質問にも答えてくれてないよね？
まだ名前も聞いてない！）」

「……。」

あの子、黙り込んじゃった。

何だろう、すごく…寂しそうな目。

「……ッ！」

あの子は意を決したかのように鎌を振り上げる。

雷の弾が浮かび上がる！

やっぱり、戦うしかないのかな…？

＝＝＝

「なんで君たちは、そのロストロギア…ジュエルシードを集めているんだい？
どけてくれるのは有り難いが、どうにも胡散臭い。
それにここらで暴れられると迷惑なんだよ」

「ごちゃごちゃうるさいっ！はぁっ！」

ちょこまかとすばしっこい奴だ、この白いの。猟犬モードでもなかなか攻撃を当てられない！
使い魔でもないようだが…こいつこそ胡散臭い。何でジュエルシードを集めているんだ…？
いや、そんなの関係ない！あたしの爪が奴を捉える！そのまま八つ裂きにしてやるーっ！

「うっ」

ふん、呆気ない…。
でもこいつからはどうも…さっきまで生きていた感じがしない。

「全く、何するんだよ。あまり殺されるのは都合が悪いんだけどな」

「なっ、偽物！？」

奴の死体は確かにここにある。
それなのに、全く別のところから平気な顔で現れた…！
余裕の表情…思わず、今までに感じたことのないような恐怖を覚える。
…いやいや、ここで立ち止まるわけには！

＝＝＝

「目的があるなら、ぶつかり合ったり競い合うことになるのは仕方がないかもしれない。
だけど、何も分からないままぶつかり合うのはいやだ！
わたしも言うよ、だから教えて！どうしてジュエルシードが必要なのか！」

「…私は…」

やっぱり、悲しそうな目。
きっと本当に大事な事情なんだろうな…。

「フェイトッ！答えなくていい！ジュエルシードを持って帰るんだろう！？」

突然下から声が聞こえる。たぶん、キュゥべぇを襲っている赤い犬だ！
相変わらずキュゥべぇはこの犬を軽くあしらっているようにも見える。
それより、フェイト…この子の名前…？

「…っ！」

あの子…フェイトちゃんは鋭い雰囲気を取り戻す。
こっちに鎌を向けてきた！

「Ｇｒａｖｅ　Ｆｏｒｍ」

また変形！槍みたいな…。

……ドクン……

「「！！」」

何この感じ…まさかジュエルシードが動き出した！？
そう思った時には、フェイトちゃんがあれに向かって動いていた！
わたしも追いかける！

……ドクン……

このままじゃまずい！二人で急加速！
そして、ジュエルシードにお互いの武器が触れた…

「まさか…なのはっ！すぐに杖を持って離れろ！！」

「キュゥべえ…？」

「早く！」

キュォォォン――――――……

突然ジュエルシードが光を放った！

なんだかすごいエネルギーが出ているような感じ…。
油断してると吹き飛ばされそうになる！

「く…ぅ…ッ」

「…ん…くぅっ」

フェイトちゃんも驚いてたけど、必死に耐えているみたい。
でもどんどん波動が強くなって…

（ピシッ）

「「ああっ！？」」

突然お互いの武器にひびが走った！
次の瞬間、

世界が、光に包まれた。

「いいやぁぁぁぁーーーーーーーーっ！」

「くぅっ……！」

たまらず吹き飛ばされたわたし。また地面にたたきつけられた…。
あのすごい爆発は…止まったみたい。
フェイトちゃんは…何とか空中にとどまってる。

「ごめん…戻って、バルディッシュ」

「Ｙｅｓ，　ｓｉｒ」

立ち上がれない…。
ジュエルシードは…何だかオーラみたいなのが出てる。
暴走してるのかな？

「…っ！」

フェイトちゃん…突然ジュエルシードに向かって走り出した。
一体何を…

「フェイト…！？駄目だ、危ないっ！」

あの犬の声。
それに構わず、ジュエルシードを両手で握りしめた！

「ぐぅぅっ……！止まれっ…止まれっ…！」

まさか、自分の手で暴走を止めようとしている…！？
大丈夫なのかな…、凄く苦しそう…！
あ、手から血が…

「止まれっ…止まれッ…止まれッッ！！」

ジュエルシードは、止まった。
フェイトちゃんが…やったんだ。

「はぁっ…はぁっ…はぁぁ…」

力を使いはたして崩れ落ちるフェイトちゃん。
一体、何があの子をあそこまでさせるの…？

「フェイトぉぉぉぉぉぉぉーーーーーーっ！！！」

地面に倒れる前に、あの赤い犬が…あ、人間に戻った。
犬だったお姉さんは、あの子を抱き抱えるとどこへともなく飛び去ってしまった。
わたしに、刺すような視線を残して…。

「なのは…大丈夫？」

「うん、そっちこそ、何ともないみたいだね」

キュゥべえは無傷みたい。
犬のお姉さんとあんなに激しく戦っていたのに…？

「ジュエルシードは…奪われてしまったか」

「うん、ごめんね…
そういえば、わたしのソウルジェムは…結構戦ったのにあんまり濁ってないね」

「…きっと今の爆発で一気に浄化されたんだろう。
あれには濁りを抑える力があるとはいえ、これほどとは…
今夜はしっかり休んでおくといい」

そう…だよね。

「（…くそっ、失敗したな。
まさかこれが次元震を引き起こすようなものだったなんてね…。
これじゃあ管理局が来るのも時間の問題だ。
しかもあの次元震でなのはのジェムもほぼ完治。
そろそろなのはを手放さざるを得ないかもしれないな）」

＝＝＝

…今日もあの子と戦った。
私のことが気になっているみたいだった…。
「フェイト…、大丈夫？痛くない？」
「うん、ありがとうアルフ」
いつもアルフに守ってもらってばっかり。
情けないな…。
「…フェイト、やっぱりこんなことやめない？
あたしのご主人様が…傷つくのなんて…見てられないよ！」
「ううん、やめられない。母さんのためなんだから…。」
母さん…ジュエルシードを何に使うのかは教えてくれない。
でも、絶対に必要なものだって言ってた。止められるものか…。

「お土産って…お菓子？そういうの…あの人が喜ぶかなぁ…。」
「分からないけど…こういうのは、気持ちだから」
今日は母さんに会いに行く日。ジュエルシードを持っていく日。
喜んでもらうために、ケーキまで用意した。
…きっと、大丈夫。
「次元転移。目標地点…時の庭園」

「確かにジュエルシード…間違いないわ」

「…はい…母さん…」

時の庭園。私達の家。
ジュエルシードを集めているのは、私の母さん。
目的は分からないけど、大事な母さんの為だから、私が地球に赴いている。
母さんは…正直、怖い。
でも、ジュエルシードをちゃんと持ってきたんだ。褒めてくれるよね…。

「…良く頑張ったわ…」

「……！」

私の口元が、かすかに緩もうとする。
しかし…次の一言がそれを許さなかった。

「…って、褒めてあげたいところだけど！」

「ひっ！？」

「私は貴方に、何て伝えた？
二十一個のジュエルシード、全部を集めてくるようにって言ったわよね。

あれは母さんの研究にどうしても必要なものなの。
なのに…こんなに時間をかけて、たった3つ…！？」
…やっぱり、褒めてくれなかった…。
母さんが、自分のデバイスを握りしめる。怖い…！
「…？それは？」
母さんが私の持ってきたお菓子に気づく。
これくらいは、受け取ってくれるよね…？
「あの…母さんに…」
「ッ！！」
鋭い平手打ち。
せっかく買った、ケーキの箱が…っ！
「そんな暇があったら、言われたことをちゃんとおやりなさいっ！」
「…ごめんなさい…っ」
母さんへの気持ちが届かなかったのは悔しい。
でも、今の母さんにとってはジュエルシードが最優先のはず…。
だから言っていることは何も間違っていない。私が悪いんだ…
「残念だわフェイト…、私は貴女を叱らないといけないの」
母さんは、デバイスを鞭に変える。
また、されるんだ…。

「…はい…」

「うああっ！！ああっっ！！いやあっ！」

「ふんっ！ふんっ！」

「あああっ！！！ひぁぁっ！！ああああ！！！」

「何で…、何でだよ…！
ちゃんと言われたものを持ってきたじゃんか…！！」

「はぁっ…、はぁっ…、はぁっ…」

やっと…終わった…。

「ジュエルシードは、母さんの夢を叶えるのにどうしても必要なものなの。
母さんの期待を、裏切らないで頂戴」

「はい…母さん…」

＝＝＝

やる気を出してくれることはありがたいけど、
ちょっと張り切りすぎじゃないかしら？

「分かってるわね？次元震の発生は、あなたの探し物がある可能性を示唆しているわ」

最近アースラに訪れていた少年にも声を掛けておく。
真面目な人ではあるけど…何が起こるか分からない以上、引き締まってもらわないと。

「はい、分かっています…リンディ艦長」

「よろしい。じゃあ頑張りましょう、ユーノ・スクライアー」

＝＝＝

「（あのねキュゥべえ、わたしやっぱりあの子のことが気になるの）」

「（あの子…確か『フェイト』と呼ばれてたね）」

「（うん、あの子ね…何だかすごく寂しそうな目をしていたの。
それにわたしを撃った時、ごめんね…って言ってた。
きっと理由があると思うんだ。戦ってでも、ジュエルシードを集めたい理由…）」

「（…大抵の行動には、目的がつきものさ。
僕たちが知る由もないことだという可能性も十分にある。
こういう時に限って、相手の意志も強い。力づくで解決するしかないんじゃないかな）」

「（うん…でもわたしね、あの子と話をしたい。
そして、お互いの本当の気持ちと向き合いたい）」

「（話か…。まあ向こうが素直に喋ってくれるとは思わないけどね。
どうせ知られたら困るような話だよ。今までだって、何度か聞いてみたんだろう？
どうしてそう無駄な努力を続けるんだい？わけがわからないよ）」

「（キュゥべえ…なんだか、時々冷たいこと言うね。間違っては無いんだろうけど…）」

「（まあね。他の子にもよく言われるよ）」

「（でも、いつかはきっと通じ合えるはず。だから、そのために…）

第四章「わたしって、ほんとバカなの」（前書き）

第四章。

説明回乙ｗｗｗｗｗ

とりあえず、まどかを知らない人にとっては

説明でありネタバレである。

閲覧注意。

第四章「わたしって、ほんとバカなの」

「グモォォォォォォォォォォォォ！！」

公園の木に取り憑いたジュエルシードが、根っこを伸ばして襲ってくる！

「キュゥべえ、逃げて！」

「安心して、もう逃げてるよ」

わたしも高く飛びあがって根っこを避ける。
さっきから戦っているけど、これ…強い！
根っこをバリアで防いでも、次から次へと攻撃が来る。
負けじと弾を撃っても、相手が張ったバリアで防がれちゃう！

「うぉぉ？生意気にバリアまで張るのかい」

「うん、今までのより強いね…それに、あの子もいる」

フェイトちゃんと赤い犬さんも来ている。
あっちはあっちで弾を撃ったりしているけど、全然効いていない！

「アークセイバー…いくよ、バルディッシュ！」

「Ａｒｃ　Ｓａｂｏｒ」

あの子の出した衝撃波がジュエルシードの木を捉えた！
このチャンス、逃したりしない！

「撃ちぬいてーーーーーっ！」
レーザービームを放つ！…だめ、倒しきれない！
「貫け、光雷！」
「Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｍａｓｈｅｒ」
フェイトちゃんも雷のレーザーを撃った！
必殺技の同時攻撃、これなら…！
「グモォォォォォォォォォォォォ！！！」
「「ジュエルシード…封印！！」」

＝＝＝

「ユーノ、どうやらビンゴのようよ」

「はい…お手数をおかけします」

さて、急いでクロノを向かわせないと…、

…ちょっと待って。

「今…『二者』と言ったわね？」

「はい…。我々の観測した黄金色の魔導師と共に、

彼女と同年代と思われる、桜色の力を操る少女がロストロギアと交戦中です」

もう一人…？

観測結果ではミッド式魔導師が一人とその使い魔、他に検索可能な魔力反応はなしだった筈だけど…。

でも確かにディスプレイには、少女が二人映っている。

とりあえず、補佐のエイミィに調査を頼んでおこうか…

「エイミィ、その少女を調べるわ。まずは魔力を解析して」

「はい、しかし時間がかかるかと思われます。

魔力の資質自体は凄く優秀のようですが、彼女の魔法は我々の使う魔力とは違うようですね。

解析中…、んなっ！？」

エイミィが突然大声を上げる。一体何が…？

「ちょっと…どうしたの！？」

「反応が…要注意リストＡ＋＋の『ポルート式』と完全に一致！
彼女はポルート式魔導師、一般名称『魔法少女』です！」

「「！？！？」」

私…いや、この場にいた全員は耳を疑った。それじゃあ、あの子は…！
こうしてはいられない！直ちに対処しなくては！

「クロノ！出られるわね！？」

「転移座標は特定済みです！命令があればいつでも！」

「では、これより現地での戦闘行動の停止、ロストロギアの回収、可能ならば関係者全員の確保を！」

「了解です！」

すぐにクロノが転移し、現地に向かった。
いけないいけない、私としたことが焦ってしまったわ…。
でもこれは予想を上回る緊急事態、迅速に収拾しないと！

「艦長、これって…！」

ユーノが震えながら囁く。
この事態、本来局員ではない上にジュエルシードが目的だった彼こ

そが、
最も驚いていることでしょうね…。

「ええ…、間違いない…。『インキュベーター』がいる…！」

＝＝＝

やっぱりフェイトちゃん、戦う気なんだね…。
でも、もう迷わない！

「わたしも譲れない。理由を聞きたいから。
フェイトちゃんがなんでジュエルシードを集めてるのか、
どうしてそんなに、寂しそうな眼をしているのか…」

「…！」

「わたしが勝ったら…ただの甘ったれた子じゃないって分かってもらえたら、
お話…聞かせてくれる？」

フェイトちゃんが武器を構える。
乗ってくれた…！あとは、全力で戦うのみっ！

「「……っ！！」」

お互いに急接近！
どっちからともなく武器を振り上げる！そして、ぶつかる…

「そこまでだっ！！」

わたし達の激突は、突然間に入った男の子によって遮られた。
黒い服、黒い髪…どことなくクールな印象。
あれ…？お互いの手足が青い光の輪で封じられてる！？

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。さて…事情を聴きたい、同行を願おうか」

「管理局…ッ！」

管理局…？よく分からないけど、何となく悪い人たちじゃなさそう…。

でも、赤い犬の人は警戒している…。

「そこの白い君。白い小動物は一緒じゃないのか？」

「キュゥべえですか？…さっきの木と戦っていたときに、森の中に逃げて行きました」

「…くそっ、逃がしたかっ…！」

『逃がした』って…。

キュゥべえ、この人たちに追われてるの…？

「まずい…フェイト、撤退するよ！今そのバインドを解くから！」

「アルフ…！」

赤の人…アルフさん？…が叫ぶや否や、こっちに弾を撃ってきた！

管理局の男の子…クロノくん？がバリアを張っている間に、フェイトちゃんが逃げる！

あ、いつの間にかフェイトちゃんを封じていた光の輪（バインド？）が消えてる…？

「フェイト！？」

違う、逃げたんじゃない！ジュエルシードを取りに行ったんだ！
飛んでいって、手を伸ばす！

「…がっ！？」

「フェイトーーっ！！」

フェイトちゃんを男の子が撃ち落とした！？
すぐにアルフさんが犬になってが助けに行く、だけどあの子、手に持った杖に再び力をためている…！？
まさかトドメをさす気！？

「だめーっ、撃っちゃだめー！」

「！？」

わたしは力いっぱい叫ぶ！
男の子の動きが一瞬止まる…あ、その隙にフェイトちゃん達、逃げていっちゃった…

「クロノ、お疲れ様」

いきなりクロノくんの目の前に、ディスプレイ？みたいなものが出てきた。
女の人が映ってるけど…

「すみません艦長、確保できたのは…ロストロギアと魔法少女の子

のみで…」

この女の人、偉い人なのかな…？

ふぇぇ、何が何だか分からなくなってきたよぉ、キュゥべえもいないし…。

「うーん…ま、大丈夫よ。さて、詳しい事情を聴きたいわ。その子をアースラまでご案内してね」

「了解」

そんなわけで、何が何だか分からないまま、

わたしは何やらサイバーチックな所に案内されたのでした。

「ここは…？」

「時空管理局の次元航行船『アースラ』の中だ。

次元空間内には、君たちの世界である地球や僕たちの世界『ミッドチルダ』、

このほかにも多くの世界がある。

これらを行き来するのが次元航行船、そしてこれらの世界をまとめたり監視したりするのが管理局だ。

ああ君、変身は解除してくれないか。無駄に魔力は使ってほしくない」

「あ、はい」

変身を解く。
この…管理局っていう人たちは、ジュエルシードのことには詳しそう。
キュゥべえや魔法少女のことについてもいろいろ知っているといいんだけど…。

「艦長、来てもらいました」

「え……」

廊下の先にあった部屋では、さっき艦長って呼ばれてた人と…
黄土色の髪をした、クロノくんより少し年下に見える男の子が待ってた。
でも、部屋の中は…盆栽、生け花、ししおどしとか…
なんだか和風な雰囲気。

「初めまして、この船の艦長、リンディ・ハラオウンよ。どうぞ楽にして」

というわけで、わたしは自己紹介や知っていること、経験したことを一通り話しました。
あんまり役には立てないと思うけど…
あ、もちろん手持ちのジュエルシードは預けましたよ?

「なるほどね…なのはさんは結構何も分からないまま、色々な事に

巻き込まれているみたいね…。
ここまで来てもらった事だし、一通りのことは話しておくべきね。聞きたいでしょう？」
「…はい、お願いします！」
リンディさんの言うとおり、わたしはこの事件についてほとんど何も知らないまま戦っていた。
これからどうなっても、知っておきたいことは山ほどあるの。
「じゃあ話すわ。まずは…ロストロギアについては分かる？」
「あ、はい。キュゥべぇから聞きました。
確か、滅びた世界が残した危ない技術の遺産…ですよね？
でも、ジュエルシードが何なのかは分からないです…」
「…」
なんだか、三人とも顔をしかめてる。
「…なら最初に説明するべきは、ジュエルシードの事かしら。ユーノ、お願い」
「はい…」
ユーノって呼ばれた黄土色の男の子が進み出る。
「貴女も見たと思いますが、あれはちょっとしたきっかけで暴れたり、何かに憑依したり…
流し込まれた魔力を媒体として次元震を起こしたりする、危険な

エネルギー結晶体なんです」

「…そんなものが、なんでうちの近くに？」

ユーノくんがうつむく。後ろめたいような…

「それは…僕のせいなんだ」

「…？」

「僕は故郷で遺跡の発掘を仕事にしていて、古い遺跡の中でアレを発見して…

管理局に依頼して保護してもらおうと思ったんだけど、

僕が手配していた次元船が途中で事故にあったみたいで…

二十一個のジュエルシードがこの世界に散らばってしまった」

二十一個も…ユーノくん、責任を感じていたんだ。

話の続きをリンディさんが引き取る。

「ユーノはね、これらを回収するためにこの船に乗り込んで色々調べていたの。

そうしているうち、なのはさんとあの女の子の起こした爆発…『次元震』を観測したわ。

それでそちらの世界に来てみたら、見事に大当たりだった…というわけ。」

リンディさんが、手元にある抹茶を飲む。うわ、この人抹茶にミルクと砂糖を入れてるぅ…

そんなことを気にせず、クロノくんも話に続く。

「ジュエルシードの他、多くのロストロギアは私たち管理局や保護組織が
正しく管理していなければならない品物。
例えばジュエルシードは、たった一つでもあれだけの威力の次元震を起こせる。
複数個集まって動かした時の影響は、計り知れない」

「大規模次元震やその上の災害『次元断層』が起これば、
世界の一つや二つ、簡単に消滅してしまうわ。そんな事態は防がなきゃ」

世界が簡単に消滅って…！？
今まで無防備に持っていてよく無事だったなぁ…。

「だから、これよりジュエルシードの回収は私たちが担当します。
あなたには今回のことからは手を引いてもらうわ」

そう、だよね…。
こういう危険なものは、専門家とかに任せておいた方がいいよね…。

でも…フェイトちゃんのことも気になるし…。

「…あの、わたしも回収に協力しちゃいけませんか？」

「協力は受けられない。しばらく君にはこの船に来てもらうことにはなるけど」

協力は受けられない…か。
やっぱり、個人的な理由は聞き入れられないんだよね…。

「…、やっぱり、わたしみたいな部外者は関わっちゃ危ないんですよね…」

あきらめて、理由を確認する。
だけど、返ってきた答えは予想していなかったものでした。

「それもあるが、一番の問題は別にある。」

「別の問題…？」

さっきまで穏やかだったリンディさんの顔が、急に険しくなる。
隣にいるユーノくんもちょっと真剣になったような…。

「ええ…、あなたが今続けている『魔法少女』についてよ」

…キュゥべえは今いない。
でも、この人たちは魔法少女について色々知っているみたい…。
リンディさんの雰囲気が更に固くなる。

「…、これから話すことは、とても危険なことなの。
聞きたいならば、どうか気を楽にして聞いて。そうすれば必ず助けてあげられるから。
もし、話した時のあなたの反応によっては…」

一呼吸おいて、リンディさんが続ける。
それは、今までの流れからは考えられなかった…残酷な話だった。
「…私たちは、なのはさんを殺さざるを得なくなる」
「……！！！！」
ちょっと待って！殺すって…！！
もしかして、魔法少女って実はすごく危ないものだったりするの！？
「落ち着いて！気をしっかり持てば必ず助かる。
絶望さえしなければ…絶対に君を殺したりしないから！」
「は、はい…」
クロノくんに励まされ、なんとか落ち着きを取り戻す…。
「もちろん、怖いなら話を聞かなくても構わないわ。
どちらにしろ、定期的にこの船で治療することになるけど。
…本当に聞きたいかしら？」
「…はい、教えてください」
「よろしい！…ユーノ、貴方もこの話聞くわね？」
「はい、お願いします」
リンディさんは、さっきよりこころもち柔らかくなった気がする。
ユーノくんは相変わらず固い…というか緊張しているみたい。
あの子はなんだか、魔法少女のことは知らなさそう。

「なのはさん…まず、あなたのソウルジェムを見せてくれないかしら」

「は、はい！」

懐からソウルジェムを取り出す。
やっぱりさっきの戦いで、ちょっと濁ってるな…。

「よかった…これなら鎮静剤無しでも十分間に合うわ。
それにしてもあなた、今まで結構戦ってたわよね？」

「…？」

「君の手持ちのジュエルシードの数から考えるに、
戦った時間の割には濁りが少ないな。『魔女』とも戦っていたのかい？」

「いいえ、きっとジュエルシードをいくつか持ち歩いていたからでしょう。
次元震にも巻き込まれたようですしね」

「そう…ですね。
じゃあ君は魔女と戦ったことはないのかい？」

「…、キュゥべえは、さっさとジュエルシードやフェイトちゃん達を片づけて、
それから魔女と戦ってもらいたい…って言ってました」

「…確かなのはさんは、彼と契約した時に丁度ジュエルシードに襲

われていて…
　願いは特に無かった、で合ってるわね？」
「はい…」
「…、汚い…！」
汚い、って…？
「あ…、早く話を聞きたいよね？」
「は、はい！」
「もう一度言うわ。絶対に絶望しないでね。絶対に」
「…はい」
しつこく念を押してくる…
でも、大丈夫。絶対に助かるって言ってたし…！

「単刀直入に言うわ。そもそも『魔女』とは、絶望した魔法少女のなれの果てよ」
「…え？」
魔女って…元々魔法少女だったってこと…？

「詳しく話そう。まず、君たちがキュゥべえと呼ぶ小動物、
あれの正式名称は『インキュベーター』。孵化器って意味だ」

「インキュベーター達の世界では、宇宙の寿命を伸ばすための研究をしているみたいなの。
そのためには大量のエネルギーが必要らしいんだけど…
奴らは人間の感情が持つエネルギーに目をつけた。
そして『希望が絶望へと変わる瞬間』に、大きなエネルギーが発生することを突き止めたの。
しかし何もしないとそのエネルギーは拡散し、使い物にならないのが現実」

「そこで奴らは、人間の魂を固形化することで絶望のエネルギーを分散させない方法を見出した。
その固形化した魂というのが…ソウルジェム。その名の通り、魂の宝石なんだよ」

ソウル…ジェム…。この宝石が、わたしの魂…。
わたし、自分の魂を手に持って歩いていた…？

「じゃ、じゃあ…わたしの体は一体？」

「一口に言ってしまえば…抜け殻だ。
君はソウルジェムの中から、自分の体を操っているようなイメージだよ」

「抜け殻…。
それって、わたし…ゾンビにされたみたいなものじゃないですかっ！」

「…、否定できないわ。むしろ、まさにその通りというべきね…。」

「そんな…！」

「落ち着くんだ。助けてあげると言っただろう」

あ…つい取り乱してしまったけど、そうだよね。
わたし、助かるんだよね…。
そういえばキュゥべえと契約した時、体に違和感を感じていた。
もしかしたら、ゾンビになったからかも…

信じられない話だけど、
こうして納得すると、途端に全部ほんとの事みたいに思えてくる。
これまで話されたことも、これから話されることも…。

「ごめんなさい…」

「いいえ、むしろよくそれだけ平常心を保てたわ。
…話を続けましょう。こうしてインキュベーターは、
多くの管理外世界に進出して…主に第二次性徴期の少女と契約するようになったわ。願いをかなえる、という奇跡をちらつかせてね。
貴女は魔法少女としては珍しい若さだけど、奴が目をつけるだけの素質があったんじゃないかしら。
インキュベーターの進出した世界は文明の進歩速度が恐ろしく速いという統計が出ているけど、
これも少女たちの願いによる奇跡の賜物なのかもね」

願い…わたしは何も願わなかったけど、
他の子たちはそうとうすごい願いを叶えてもらってたのかな…。

でも、その結果、自分がゾンビの体になる…

「そして、契約してソウルジェムとなった子は魔法の力を得る。
インキュベーターとの契約により使える魔法は、私たちが使う『ミッドチルダ式』と区別して、
便宜的に『ポルート式』と呼んでいるわ。
これは使い方によっては、ミッド式等と比べて非常に高い効果が発揮できるんだけど…
彼女たちがこれを行使したり、心に絶望や呪いをためたりすると、ソウルジェムは濁っていく。
自分の体を操ることでも魔力を使うから、何もしなくても濁るの」

「そして、宝石が濁りきった時…
魔法少女は魔女となり、人々を祟り、呪い殺すことしかできなくなるんだ。
魔女が人を殺す数は決して多くないけど、それ故に感づかれる可能性も低い。
奴らがいる世界における自殺事件の原因は、ほとんどが魔女の呪いによるものだよ。
魔法少女である君に事件に関わってほしくない一番の理由がこれなんだ」

ということは…協力させてくれない理由は、
魔法を使いすぎると魔女になって、人を襲うからなんだ…。

「濁りきったソウルジェムは『グリーフシード』と呼ばれ、
絶望エネルギーの塊となる。奴らはこれを集めるために、貴女たちの世界に来ているのよ」

「……っ」

「魔女は特殊な空間に潜んでいるわ。
そこに自由に入れるのはポルート式魔法の使い手、いわば魔法少女だけなの。
結果、魔女を倒すには魔法少女の力が必要…というわけ。
だから…人間は永遠に彼女たちを必要とするわ」

そして、魔女を倒していてもいつかは魔女になる…、
そんな…あんまりだよ…っ、こんなのって無いよぉ…！

「奴らは契約時に人間の願いを叶えているが、それも戦略のうちだろう。
願いは…残念ながら、裏目に出てしまうことも多い。
愛する人を救うという願いのもとに契約し、その人に拒絶される…という具合にね。
戦いに身を置くことになってまで叶えた願いに裏切られる…ほとんどの魔女はこうして生まれているんだ。
しかも稀にではあるが…インキュベーターが、少女が絶望する運命となるように糸を引いている例もある」

「なのはさんの場合、否応なしに契約せざるを得ない状況だったわね。
奴にとっては好都合だったことでしょう…。
貴女を生かしたのも、魔女や魔法少女を勝手に滅ぼす恐れのあるジュエルシードを排除するためじゃないかしら。
…一部のロストロギアから発せられる魔力には、魔女を遠ざけ…魔女化を抑制する効果があるの」

やっぱりジュエルシードが魔女を遠ざけて、わたしが魔女になるのも抑えていたんだ…

だから海鳴には魔女がいなくて、もしかしてキュゥべえはこれが気に食わなくて…

「…つまり、わたし…たちはキュゥべえたちの道具か、食べ物でしかないんですか？
キュゥべえに騙されて、地球のみんなを殺していく運命なんですか！？
絶望して魔女になった子たちも、悲しいまま…
何も知らない…いつか魔女になる魔法少女の子に殺されていくんですかっ！？」

気づくと、わたしの目には涙があふれていた。
絶望…とは違う、純粋な悲しみだと思う。
騙されていたくやしさ、自分が世界を壊しているという罪の意識、
他の魔法少女や魔女になったみんなへの同情…

「…魔女を人間に戻すことは、僕たちの技術でも不可能だ。
だから魔女となってしまった子に対しては、終わらせてあげるのが情けだと思う。悲しいけど」

「…そう。それにインキュベーターには感情が無いわ。
奴らにとっては、希望も絶望も情けも呪いも、ただの”自分には関係ない現象”でしかないの」

話を聞くにつれて、キュゥべえについて今まで抱いていたイメージが崩れていく。
信じたくはなかったけど、真剣に話されると本当だと分かっちゃう。
ひどいっ…！ひどすぎるよっ…！どうしてこんな…っ！

「何とかならないんですか…？

他の魔法少女のみんなは助からないんですか！？」

「…ジュエルシードによる次元震が観測されたから地球に来たけど、魔法少女の存在は予想外だったわ。

でもこれの対策も、我々時空管理局の役割。

これより我が隊は、ジュエルシードの確保・同事件の収拾に並行し…これが終わり次第全力で、

地球の魔法少女の救出作戦を実行します！」

「あ…！ありがとうございますっ！」

「残念だが、インキュベーターを倒す方法はまだ無い。

例え殺しても、どこからともなく”湧いてくる”。

奴らの拠点である世界も、どこにあるのか全く分からない状況なんだ。

これについては管理局の本部が研究を行っている。

今は根本的な対策ができなくてすまない」

まだ解決はできないんだね…。でもこれで、ちょっとは助かる人が増えるんだよね。

ちょっとだけ、希望が見えた気がします。

「私たちの技術を使えば、魔法少女を人間に戻すことはできるわ。

でもそれには時間がかかる。

あなたには定期的にここに来てもらって、身体やソウルジェムのデータの解析に協力してもらうわ。

そうね…大体一週間経てば、人間に戻すための手術の準備は整うんじゃないかしら」

「はい…どうもありがとうございます」

「…じゃあ早速、身体検査といきましょうか。ついてきて」

ということで、しばらくこの船…アースラだっけ、に通うことになるのでした…。
魔法少女生活は、たぶんおしまい…
というわけにもいかないかも。

「なのは…だったよね」

検査が終わった後、わたしは転送ゲートから海鳴に帰ろうとして…
呼びとめられた。
この話し方と、黄土色の髪…ユーノくんだ。

「きみに、これを預けてもいいかい？」

ユーノくんが差し出した手には、真っ赤な丸い宝石。
ついつい見とれてしまいそう…。

「ユーノ…くん、これは？」

「これは『レイジングハート』…ミッドチルダ式魔法のデバイス、つまりは魔法の杖だ」

わたしは、ユーノくんの言葉の意味を理解するのに一瞬かかった。そのあとびっくりしすぎて叫んじゃったの。

「え…？わたし…もう魔法少女やめるから！大体こんなの続けたくないよっ！」

「うわー待って待って違う違う！ミッド式って言ったろう！
これは僕たちや例の金髪の少女が使う魔法と同じなんだ。魂を抜かれたり魔女になったりはしないって！」

「あ…え…っと…、…ごめんね」

一瞬かかって理解したのに、勘違いでした…。
思わず自分自身の情けなさにため息をつきたくなる。

「でもなんでわたしに？…わたしでないと使えないの？」

「君はかなり大きい潜在魔力を秘めている。ミッド式の魔法も君なら使えるはずだ。
実を言うと、今回の事件では人手が足りないように思える。
最初はジュエルシードのみを目的としてこっちに来たからね。
一応僕も戦いに協力することはできるんだけど、レイジングハートは使いこなせない」

わたしならこれを使いこなせる…ってことだよね。
でも、キュゥべえに騙されたこともあるし…

「…本当は、君を巻き込むことは気が引ける。
もちろん局としても、これ以上民間人を巻き込むわけにもいかないと思うんだ。
でも、万が一…危険な状況になったら、君の力が頼りなんだ」
ここまで言うと、ユーノくんが急に改まって頭を下げてきた！
「…お願いします！持っているだけでもいい…。
せめてジュエルシード事件が終わるまではこれを預かってください！」
ここまで頼まれたのは初めてだった。キュゥべえはこんな態度、取りそうもないよね…。
…決めた。巻き込まれちゃったとはいえ、乗りかかった船…だし。
それに、もし協力することになれば、フェイトちゃんに…会える。
あの子に言いたいこと、もうちょっとでまとまるんだ。
伝えられるものなら、絶対に伝えてみせる…！
「わかった。わたし、レイジングハートを預かるよ」
ふぇぇ…やっぱりお人好しなのかなぁ、というかわたしってほんとバカ正直。
自分でも呆れちゃいます…。
「…本当にありがとう！
じゃあこの紙も受け取って。レイジングハートの起動方法や使い方等をメモしておいたんだ」

ユーノくんから渡された紙を見る。
そこには杖を使うための呪文とか、レイジングハートの特性とかが書いてあった。
とりあえず、ゆっくり見とかないと…。

こうして、早くも魔法少女…もとい、魔導師としての新しい運命が見えてしまいました…。

＝＝＝

いつものあの子も、これから管理局に行くのかな？
また、戦うのかな…。

「やっぱり二人でどこかに逃げるべきなんだ！
あんな鬼婆の言うことなんて…聞くもんじゃないよ！」

「母さんを…悪く言わないで」

「言うよっ…！あたしはただ、フェイトに笑顔でいてほしいだけなのに…！」

第五章「後悔なんて、あるわけないの」（前書き）

第五章。

結局レイハさんを入手しちゃうなのはさんでした。

これでQBとの縁を切れた…のか？

第五章「後悔なんて、あるわけないの」

「魔法少女救出班、行動開始！
引き続き、現地における運動選手やアイドル、主に”期待の新星”といわれる少女を重点的に調査！
ポルート式の反応を見つけ次第、接触を試みるように！」

…わたしがアースラに初めて来た次の日には、
アースラの人たちは組織の組み直しを済ませ、魔法少女を助けるために出動していました。
リンディさんの話だと、”内包した因果の大きさ”…
つまり、その人の知名度や、その存在が世界に与えうる影響などによってポルート式の素質は変わるみたい。
素質が高い魔法少女ほど、魔女になった時のエネルギーも多く回収できるって言ってたの。
キュゥべえは素質の高い人を選びたがるはずだから、管理局も有名人を中心に調べ回っています。
わたしは、改めて管理局ってすごいと思いました。この人たちなら信頼できると感じます。

そして四日目。
やっぱりしらみつぶしに調べているみたいで、なかなか見つけられなそう。
でも、昨日にやっとひとり…魔法少女を見つけたようです。
その子はこれからアースラで毎日検査を受けるみたい。
確か中学生で、名前は…千夏さんだっけ？なんでも、書道において日本一だとか…
時間の都合でわたしとは会えないけどね。
とにかく、管理局の行動力には驚きなの。日本の行政にも見習って

ほしいくらいです。

「エイミィ、ジュエルシード並びに金髪の魔導師…フェイト・テスタロッサの追跡状況は？」

「テスタロッサ…。かつての大魔導師と同じファミリーネーム…」

クロノくんが何かつぶやいている。フェイトちゃんの素性に心当たりが…？

とりあえず管理局は、ジュエルシード集めも同時にやらなきゃいけないわけで…本当に忙しそう。

ユーノくんも人手が足りなそうって言ってたし、彼はジュエルシード集めの方を頑張ってるみたい。

「今捜索域を広げて探してますが、なかなか…あ！魔力反応！

解析…フェイトちゃんのものである可能性大！」

「よくやったわ！早く現場の状況を！…誰かクロノを呼んで！」

「はい、只今！」

フェイトちゃんが見つかった！

すぐに画面に駆け寄ってみるけど、いいのかなぁ…？

「フェイトちゃんの周辺にジュエルシードの反応なし。

彼女の状況は…今映像を受信…何者かと交戦中です！」

「交戦中！？」

「ダガーを操る魔導師と対峙！魔力解析…ポルート式！『魔法少女』です！」

そんな、魔法少女の子もいる…って！早く止めないと！

…でも、わたしには何もできない…。

「クロノ、只今参りました！」

「転移座標の特定を！完了次第、転移して戦闘の収拾、並びに両名の確保を！」

「了解！…特定完了！転移します！」

「…頑張ってね」

わたしには、これだけしか言う事ができない。…何もできない自分が悔しい。

管理局の人たちはみんな頼りになるし、優しいけど…

だからこそ、力になれない自分が悔しいの。

「…艦長！大変です！」

突然エイミィさんが大声を上げる。

一体何が…？

「どうしたの！？」

画面を見ていると、そこには信じられない光景が映っていた…！

「魔法少女を中心として、衝撃波と空間の歪曲が発生！フェイトちゃんが飲み込まれました！」

「何ですって…！？まさか…！」

＝＝＝

の後いきなり襲いかかってきた…！
しかも、あの白い女の子と違って…パニックになりながら闇雲にダガーを投げてきている！
「早く…ッ！はやく渡してよぉぉぉぉーーーーっ！」
彼女は狙いなど付けずにめちゃくちゃに投げてくる。
でも、だからこそ…避けるのが難しい。
「ちっ…、渡せないって、言ってるよね」
「Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ」
電撃弾を集中させて、ダガーの弾幕を貫き…命中！
「がはぁっ！！」
あの子が倒れる。
申し訳ないけど、邪魔されるわけにはいかないから…。
「あなたが何を探しているのか知らないけど、私の探し物は…多分それとは違う。
もう私には関わらないでね」
「ぅ…ぁ…！あぁ…っ！」
もがき苦しむ、地球の魔導師。
目を見開いている…。
これは、どう見ても悔しさなどといったものではない。怯え…？絶望…？

「ぁ…っ！あぁぁ…ッッ！！」

私は、言いようのない恐怖に襲われた。
まるで、あの子がもうすぐ爆発するかのような……！

「フェイトーーッ！逃げろーーッ！！！」

駄目、足がすくんで動けない…！！

「あああああああああアアア

黒猫の魔女。その性質は不安。
常に恐怖に怯えているため知的な攻撃はできないが、
その金色の目を見たものは遠からず不運な事故に襲われて死んでしまうという。
彼女の母親を連れてくれば、その恐怖は鎮まるかもしれない。

混沌とした世界。
目の前には、さっきまで戦っていた少女の、恐らく死体。
そして、…異形の怪物。

「ア・・・ウア・・・ア゛ァ゛ーッ！・・・ウァァ・・・」

「何…、これ…一体…ッ？」

恐怖と混乱で呆然と立ち尽くす私。
無茶苦茶に爪を振り回す、黒い怪物。
アルフは…いない。逃げ切ったのかな…。

「ア・・・ア゛？・・・・・ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛！！！

「ウァァァァァァァァッ！！！！！！！」

再び突進してくる怪物。
動きは速いが、直線的だから避けるのには苦はない。
…避けることはできた、しかし敵が分裂を始めた！

「はぁっ！！」

分裂により動きが止まっている敵に、まとめてバインドをかける。

「Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｍａｓｈｅｒ」

雷光が迸る！これがどの程度効くか…

（ドカァァァァーーーーーン！）

激しい爆発。そして煙が止むと…そこに怪物は残っていなかった。
そこにあるのは、彼女の体と、私のみ。
そして、世界が元通りになる…。

「フェイトっ！大丈夫…だったかい？」

アルフ…やっぱり、この変な空間からは逃げていたんだ。よかった…

「うん、大丈夫だよ…アルフ。中で怪物に襲われたけど、大したこ

とはなかった」

あの怪物…あの魔導師から出てきたというより、何となく…あの子本人のような気がする。

あの子の魔法は、最近まで戦っていた白い子と同じような魔法を使っていた。

もしかして…あの白い子もこんな風に、怪物になるの…？

私、何考えているんだろう。

あの子はジュエルシードを取りあう敵のはずなのに…。

「ねえ、もう止めようよ…！

あの白い女の子だけならともかく、管理局も出てくるし、おまけにこんな変な化け物まで現れてる…。

こんな奴らと戦ってまで、あんな奴の為に働くべきじゃないよ！」

「ごめんねアルフ…でも私は、母さんが大好きだから。母さんの願いを、叶えてあげたいから…」

「フェイト…」

「（なるほどね…、フェイトは愛する母親に尽くしてる、ということか。

しかも、どうもその母親にひどいことをされていると見える。

虐められてまで母親のためにジュエルシードを集めるなんて、

どう考えても得になるわけがない。本当にわけがわからないよ。

でも、ここまでしているからにはきっと強力な『意志』とやらが

ある筈だ。
そして現在、管理局と敵対している…、
おっと、やっぱり無いよりましだ。この魔女のグリーフシードを回収しなきゃ）」

＝＝＝

突然アルフさんに襲われ、クロノくんが倒れる！

「クロノ！？しっかり…！」

「う…ぐ…」

立ち上がろうとするクロノくん。
でも、あの体格差で不意打ちで体当たりを受けて立てるわけがないよ…。

「仕方ない、撤退しなさい」

「艦…長…、申し訳…ありません…」

ボロボロで戻ってきたクロノくん。
慰めるリンディさん。でも、リンディさんもかなり疲れた顔をしてる。
画面には、消え去る魔女空間と逃げていくフェイトちゃん達が映る。
エイミィさんやユーノくん、隊員の皆さんが追跡しているけど…
少し元気がないように感じる。やっぱりみんな、疲れているんだ…。
戦闘部隊の皆さんも、連日の仕事で忙しそう…。

…悔しい。
わたしだけ、何もできないのが…悔しいっ！

こうして、アースラに来てから七日目。
ジュエルシードは…管理局側は合計六つ、フェイトちゃん側は合計五つという状況。魔法少女はあれから全然見つかりません…。
そしてわたしは…何とか無事に手術を終えました。

「おめでとう！あなたはもう魔法少女じゃないわ。普通の人間に戻ったのよ」

「本当に…ありがとうございます」

魔法の力が使えなくなったのはちょっと寂しいけど、魔女になったりすることはなくなったから、素直に喜べる。
でもいままでゾンビだったからか、また体に違和感が…＞＜

「さて、なのはさん。もう魔法を使えるわけではないみたいだし…
ジュエルシードのことは管理局に任せてくれるわね？」

「はい…」

これでいいんだ…。
こういうことは、プロの人たちにやってもらうべきなんだよね。
フェイトちゃんが気になるけど、仕方ないよね…。

「そうそう。魔法少女救出についてだが、
君に積極的に動いてもらおうとは思わないが、人手が足りていないのも事実。
連絡先は教えておくから、もし見つけたらすぐに管理局に連絡してくれないか？」

「あ、分かりました」

クロノくんにこれを聞いて、わたしは少し嬉しかった。
わたしでもちょっとは役に立つことができる…
こう思うと、今の言葉は心強いものに感じました。

「では、すぐにゲートを用意するわ。忘れ物のチェックをしたら、すぐに帰りなさいね」

「…はい、今までありがとうございました」

そう、これで管理局ともお別れ…。
まずはアースラのクルーの皆さんに、別れのあいさつをしないと。
あ、そうだ。ユーノくんにレイジングハートを返さなきゃ…

「エマージェンシー！捜索域の海上にて、大型の魔力反応を感知！」

警報が鳴り響く。すごい一大事みたい！
もしかしたら、フェイトちゃんが…！？

「何ですって！？すぐに観測室に向かわないと！」

＝＝＝

「あ、ああ…まかせといて！
（だから…誰が来ようが、何が起きようが、あたしが絶対守ってやる）」

ジュエルシードが現れた。
太い水の柱が合計七本。水に憑依しているのか…。

「いくよ、バルディッシュ…がんばろう」

「Ｙｅｓ，　ｓｉｒ」

＝＝＝

口を突いて出た言葉は、リンディさんの返事によって止まってしまった。

「放っておけば、あの子は自滅する。
仮にそうでなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けばいい。今のうちに捕獲の準備を」

フェイトちゃん…強制発動のときのすごい魔法で疲れてるはず…。
それに水の柱からの体当たりや電撃を受けて、かなりダメージがたまってる！
それなのに管理局は、フェイトちゃんを見殺しにするの…！？ひどいよ…！

「…私達は、常に最善の選択をしないといけないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実」

でも…とは言えなかった。
クロノくんやリンディさんの言う事は、決して間違っていない。
それに、わたしなんかが何かを言える立場なわけがない…。
わたしは何もできないし、本当は関係ないんだから…。

「艦長、大変です！」

「エイミィ？どうしたの？」

「七つのジュエルシードが互いに反応中！これは…っ、…ゆ、融合暴走です…！」

＝＝＝

「サンダー…スマッシャーーーーーーーーーーーッ！！！」

結局、あの一撃は当たらなかった。
融合が終わったジュエルシードが、私の雷を避けていた…！

「グォォォァァァァ！！！！！」

七つのジュエルシード…それは今、巨大な水の龍のような様相を呈している。
勝てない…と、私の本能が告げている。
でも、絶対にあきらめるわけにはいかない。
母さんの願いを、叶えてあげたいから…！

＝＝＝

「私も行きます！エイミィ、ゲートを！」

「はいっ！…集団転移、開始！」

「管理局…！？」

ジュエルシードと戦い、傷ついていたフェイトちゃん。
自分を追っていた管理局が出てきたんだ。きっと慌ててるだろうな…。

「今は君の捕縛より、あれを止めるのが先だ！フェイト・テスタロッサ！」

「そう、今は争っている場合ではないわ。
あんなものを出現させてしまったもの。まずは責任を取ってもらわないとね」

「それにこれは…掘り出した僕の責任でもある！一緒にあれを倒そう！」

「…、くっ」

クロノくん、リンディさん、ユーノくん。
三人に言われて、フェイトちゃん達もその気になってくれたみたい。
素直じゃないみたいだけど…

「武装隊は敵の動きを牽制！
その隙にバインドで敵の動きを止めます！アルフ、ユーノ、手伝って！」

「了解！」

戦闘部隊の皆さんがジュエルシードに攻撃を加え、水龍の行動をかき乱す…
そして、リンディさんとユーノくん、アルフさんのバインドが龍に絡みつく！
いくら七つのジュエルシードといっても、三人のバインドで止まらないわけがない…！

…、止まった！

「サンダー…スマッシャーーーーッ！！」

フェイトちゃんが砲撃！…だめ、あんまり効いてない！

「ブレイズキャノンッ！！」

クロノくんから青い光線が放たれる！これならもしかして！
届く直前で敵がバインドを破ったけど、当たればひとたまりもないはず…！

（ドカァァァーーーーーン……）

「やったか！？」
爆発を見て、ある意味怖いセリフを吐くクロノくん。
でもこれなら…！
煙が晴れる。
だけど、そこにあったのは意外な光景でした…。

「グォァァァァァォォォァァァ！！！！！！！」

そんな…！
あれだけの威力の攻撃を連続で受けて、まだ生きているなんて…！
「バカな…！これでも足りないのか！？」
「くっ、やっぱりクロノのバインドで弱体化を図らなければ無理なのかしら…っ！」
「そうしたら攻撃力が足りなくなります！」
クロノくんたちの話の意味を考える。
…ということは、ギリギリで戦力が足りないというの！？
さすがに待っててはくれず、水の龍がみんなに襲いかかる！
胴体を叩きつけ、電撃を放つ！

「うあぁっ！！」

「ぐぅっ！！（なのはを呼ばないとだめなのか…？）」

クロノくんとリンディさんはなんとか避けられてるけど…
戦いなれしていなさそうなユーノくん、消耗しきっているフェイトちゃん達は
確実にダメージを受けている…。

「艦長ーっ！無理です、引き上げてください！！」

エイミィさんがたまらず叫ぶ。
…だけど、誰も戻ろうとするわけがない。
こんなのをそのままにしちゃいけないことくらい、誰でもわかる。
だから、止めなくちゃいけない…。でも、止められない…！
今のままのわたしには、何もできない…

こうなったら…もう迷うわけにはいかない！

「我、使命を受けし者なり…契約の下、その力を解き放て…」

「！？」

ユーノくんから預かったレイジングハート、使わせてもらうね。
起動の呪文はもう覚えてる！
ユーノくんは、わたしにはミッド式魔法の資質もかなりあるって言ってた。
これで、みんなの力になれるはず…！

「風は空に、星は天に、そして、不屈の心はこの胸に…」

「ちょっと…なのはちゃん！？」

エイミィさんが驚くのもあたりまえだよね。
わたしがレイジングハートをもらったことは、実は誰にも言ってないから…

「この手に魔法を…！レイジングハート、セットアップ！！」

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ，　ｓｅｔ　ｕｐ」

桜色の光がわたしを包む。
キュゥべえと契約して、初めて変身した時みたい…。
わたしを取り巻く桜色の魔法陣…フェイトちゃんと同じ形だ。

「Ｗｅｌｃｏｍｅ，　ｎｅｗ　ｕｓｅｒ．」

「よ、よろしくお願いします！」

レイジングハートがわたしに語りかけてくる。
そういえば、フェイトちゃんの武器…バルディッシュもしゃべってた。だからあんまり驚かない。

「Ｐｌｅａｓｅ　ｉｍａｇｉｎｅ　ｙｏｕｒ　ｗｅａｐｏｎ　ａｎｄ　ｂａｔｔｌｅ　ｃｌｏｔｈ」

「…はいっ！」

わたしの戦うイメージ…
それは、かつてわたしが『魔法少女』だったときに持っていた武器とまとっていた衣装。
小さいときに見た夢…正義の味方のシンボルである魔法の杖、
学校での思い出…守りたい日常が詰まった制服ベースの魔法の服！

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．　Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ，　ｓｅｔ　ｕｐ」

わたしの服が分解され、魔法使い…魔導師としての服が構築されていく。
体が変わっているわけじゃないから、魔法少女のときみたいな違和感も無い。
これで…みんなを助けに行ける！

変身が、終わった。
わたしは、戦っていたあの時着ていた服を身に着けていた。
持っている杖は…前とはちょっと違うけど、大体あってる。

「Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ」

レイジングハート…そうか、杖になったんだね。
この子と一緒に、これからみんなを助けにいくんだ！

「なのはちゃんっ！？そのデバイスは…！？」

「ユーノくんに預かってました。必要になるかもしれないからって…」

デバイス…レイジングハートやバルディッシュのことだよね。
そういえばユーノくんも誰にも言ってなかったんだ。
エイミィさんに送ってもらわなくちゃいけないのに、これはちょっと失敗だったかな…。

「エイミィさん、わたしを転送してください！」

「で、でも…！」

「お願いします！！」

わたしがやらなきゃ、みんなが危ないもの！
今のわたしなら…きっと力になれるから！

「…分かった。がんばってね？でも無理だけはしちゃダメだよ？」

「はい！」

「Ｌｅｔ’ｓ　ｇｏ！」

「…転移開始！」

「…あれは…まさか！」

「なのはさん！？その姿…その魔力…！」

驚くクロノくんとリンディさん。
わたしはもう魔法少女じゃないはず、だと思ってるだろうな。
戦闘部隊やフェイトちゃん達は相変わらずジュエルシードの龍と対峙している。
だけど、長くは持たないかも…！

「来てくれたのか！なのは…それにレイジングハート！」

「レイジング…ハート…。ユーノ、後できちんと説明してもらう」

「分かりました…」

ユーノくん…クロノくんに怒られてる。
黙ってデバイスを受け渡すのって、管理局的にはまずいのかな？

「なのはさん…本気なの？
魔女にはならないとはいえ、あなたは命の保証が無い世界に再び足を踏み入れたのよ？」

リンディさん…こんな状況でも私を心配してくれてるんだ。
でも、だからこそ！わたしはみんなを助けるの！

「危ないのは慣れてます。
それに、皆さんやフェイトちゃん達を救えるなら…後悔なんて、あるわけないもの！」

「…。ふふ、負けたわ。
それじゃああなたの高い魔力を見込んで頼むわ。砲撃に参加して頂けて？」

「はいっ！」

「艦長…！？」

「この際細かいことは抜き！緊急事態でしょう？私はまずフェイトさんの回復に回るわ。
クロノはストラグルバインドの準備、なのはさんはフェイトさんと砲撃の打ち合わせを。
他の者は最初の体制に！」

「Ｈｏｗ　ｍｕｃｈ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｋｎｏｗ　ａｂｏｕｔ　ｍａｇｉｃ？」

魔法の知識か…。

魔法少女だった時の経験が活かせればいいんだけど…

「えっと、ポルート式なら使ったことがあるけど…」

「Ｉｆ　ｙｏｕ　ｃａｎ　ｇｅｔ　ｉｍａｇｅ　ｏｆ　ｍａｇｉｃ　ｎｏｗ，　Ｎｏ　ｐｌｏｂｌｅｍ．　Ｉｍａｇｉｎｅ　ｙｏｕ'ｒｅ　ａｂｏｕｔ　ｔｏ　ｓｔｒｉｋｅ」

強い攻撃をイメージ…。

いつも決め技にしていた、必殺のレーザービーム！

「レイジングハート、これいける？」

「Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ」

よし、魔法を撃てる！

その前に…フェイトちゃんの所に行かないと！

＝＝＝

龍の形をとった七つのジュエルシード…
あれは今や、本体を残して七つ頭の龍となっている。
敵対していたはずの管理局と組んでさえも、太刀打ちできない…！

「逃げよう…フェイト…！」

「だめだよアルフ…ジュエルシードは確保するべき。それに…逃げ切れるとも思わない」

こんな時…今回は来ていないあの子なら、どうする…？
秘策を使うような子じゃないけど、みんなに勇気を与えて一緒に戦う…？
でも、今はいない…。私達には、どうすることも…

絶望に打ちひしがれる中、突如体に力が満ちてきた。これは一体…？

「ディバイドエナジーよ。もう一回攻撃いけるかしら？」

管理局の緑髪の女性が、魔力を与えてくれている！
これは…ほぼ全ての魔力を供給している！？

「…なぜ、そこまで魔力の供給を！？これでは、貴女が…！」

「大丈夫よ…、新しい砲撃係が来てくれているわ。
ごめんね、私はもう魔力が切れてて…」

緑の女性がふらふらと離れていく。
それにしても、新しい砲撃係…？管理局の新手かな。この人の指差した方向を見る。
あれは、いつもの白い子！…魔力がミッド式のものになってる。
こっちに向かって来た…！

「フェイトちゃん、一緒にジュエルシードを止めよう！
　みんながアレを止めてくれる。だから今のうち…二人でせーの、で一気に封印！」

二人で…。
こう思うと、自然と胸が熱くなる。
もしかして私は、この時を待っていたのかもしれない…！
ならば私は、やるべきことをきっちりやる！

「アルフ、バインドいける？」

「おうっ！」

あの子は攻撃の為だろう、ここから離れる。
そしてすぐさま、三人によるバインドが水の龍を襲う！
次は…私の番！
今はターゲットが分散しているから、広範囲雷撃でダメージを与える。
限界まで魔力を溜めて…一気に放つ！

「サンダァァァァァーーー…、レイィィィィィーーーージ！！！！」

＝＝＝

「Ｙｏｕｒ　ｍａｇｉｃａｌ　ｐｏｗｅｒｓ　ａｒｅ　ｉｍｐｒｅｓｓｉｖｅ．　…Ｃａｎｎｏｎ　Ｍｏｄｅ」

他のみんな…ユーノくんとアルフさん、それにクロノくんがバインドで龍の動きを止めている！

よく見ると、クロノくんのバインドの所から何かが出て、そこの周りから龍の迫力が弱くなっていってる。

特殊効果付きのバインド…！これならいけるかも！

「サンダァァァァーーー…、レイィィィィーーージ！！！！」

フェイトちゃんが辺り一面に雷をまき散らす！

七つ首の龍がもがく…！すこしずつ動きが弱弱しくなっているのが分かる。

それにリンディさんも、一生懸命フェイトちゃんを援護してくれている！

これなら…いける！

「Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ」

いくよっ！

わたしの必殺技…最大パワーのレーザービーム！

「ディバイィィィィーーーーン…、バスタァァァァーーーーーーッッ！！！！」

「七個を一発で完全封印…！？凄い…！」

「こんな出鱈目な…！」

戦いは、終わった…。
ジュエルシードの龍は爆発とともに砕け散り、
後に残ったのは…浮かび上がってきた、七つのジュエルシード本体だけ。
やった…、わたしたち、勝ったんだ！

「本当にすごかったわ…」

「予想以上だ…！なのは、ありがとう。本当に助かった」

「Ｇｏｏｄ　ｊｏｂ」

みんながねぎらってくれる。
そしてわたしは、今一番話したい相手に向かって飛ぶ…。

「フェイトちゃんに言いたいこと、やっとまとまったんだ。
わたしはフェイトちゃんといろんなことを話し合って、伝えあいたい」

一番言いたかったこと、ようやく言える。
こう思うと、真剣に話しているつもりなのに、笑みがこぼれてしまう…。

「…友達に、なりたいんだ」

第六章「それはとっても嬉しいのって」（前書き）

第六章。

レイハと契約？したなのはさん。
この章はほぼ丸々、原作には無いですね。
つまり補完。

第六章「それはとっても嬉しいのって」

（ビーッ…、ビーッ…、ビーッ…、ビーッ…、）

突然鳴り響く警報音！アースラの方からだ！

「次元干渉…！？
別次元から本艦及び戦闘空域に向けて、高次魔力、来ます！…あと六秒ッ！？」

「「んなっ！？」」

エイミィさんの声を聞いた全員が驚いて、何もできないまま六秒が過ぎた。
空が黒く染まっていく…。激しい雷の音が聞こえる…！
すぐさま海上のわたしたち、そしてアースラに襲いかかる激しい紫電！

「母さん…！？うあああぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

フェイトちゃんが、紫の電撃を一人でまともに受けた！

「フェイトちゃん…！うわぁっ！」

助けようと手を差し伸べる。
だけど紫電にはじかれて近づけない！

アルフさんはジュエルシードを確保しようと飛んでいく。宝石に手

を伸ばす…！
しかしクロノくんの邪魔が入った！アルフさんの手はクロノくんの杖を掴む。
「邪魔をぉぉぉぉぉ…、すんなぁぁぁぁぁっ！！！！！」
クロノくんを力いっぱい投げ飛ばした！
すぐにジュエルシードに向き直るアルフさん。しかし、そこにあったのはたったの三つ！
…クロノくんが七つのうち四つを確保していたんだ！
「うわあああああああああああああっ！！！！！」
アルフさんがやけくそになって…海に魔力を放った！
高い波が辺りに広がる…うわぁっ、こっちにも来たーっ！
「逃走する気…！？エイミィっ、捕捉をっ…！」
魔力の消耗で息も絶え絶えになりながらリンディさんが叫ぶ。
「駄目です、先ほどの雷撃でセンサー機能停止！」
逃げられちゃった…！
とりあえずわたしは波をやりすごさないと…！
辺りが静かになると、
そこにフェイトちゃん達はいなかった…。

「指示や命令を守るのは、集団を守るためのルールです。それは分かりますね？」

アースラでは、ユーノくんがわたしと一緒にリンディさんからお説教を受けています。
リンディさんが言うには、少なくともアースラに居る間は関係者以外へのデバイスの受け渡しはだめだって。
それにわたしも、民間人なのに危ない所にしゃしゃり出ていっちゃったし…。

「本来なら命令違反として罰を与える所ですが、融合暴走を止められたという事実も鑑みて、
今回は特別に不問とします。しかし…二度目はありませんよ！」

「「はい…すみませんでした」」

反省はしている。でもひとまず今回は、許してもらったってことでいいんだよね…。

「さて…問題はこれからね。クロノ、事件の犯人について何か心当たりが？」

「はい。…モニターに」

クロノくんの指示で、モニターが点灯する。

そこに映っていたのは…白衣を着た女性だった。
「彼女は僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師、プレシア・テスタロッサです。
そしてあの少女、フェイトは…」
テスタロッサ…。
そういえばフェイトちゃん、あの時確かに『母さん』って言ってたっけ…。
「親子…ね」
リンディさんのつぶやきは小さな声だったけど、はっきり聞こえた。
エイミィさんが何やら検索しながら続ける。
「プレシアは、ミッドチルダの民間エネルギー企業で開発主任として勤務。
でも、事故を起こして退職していますね」
プレシア…さんの素性を調べていたんだ。
管理局はこれから、プレシアさんや…フェイトちゃんを捕まえるのかな…。
「プレシア女史もフェイトちゃんも、
あれだけの魔力を放出した直後ではそうそう動きは取れないでしょう。
さてなのはさん、貴女はレイジングハートの使用者になったのだけれど…これからどうするの？」
そうだ。わたしは民間人だから管理局とは関係ないんだ。

本当ならここで家に帰って、管理局とお別れしなきゃいけないんだよね…

「まあ、急にこんなことがあって気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩考えて、それから改めてお話をしましょ？」

＝＝＝

あたしは、あいつを…許せない！
もう…我慢できるもんかッ！！

「たった八つ…これではアルハザードには届かない…！」

プレシアは、儀式用の部屋…ジュエルシードを使うための場所…で、
戦利品を眺めていた。
あいつは…！宝石の為ならどんなことでもできるというのかッ！

「うあああああっ！！！」

たまらず、あたしはプレシアに飛びかかっていた。
そのまま殴りかかる…しかしシールドに弾かれた！

「ぐぁっ！…ううううおおお

…がはぁっ！？

吹っ飛ばされた…！？

あいつ更に、トドメの構えをとってる…。

ごめん、フェイト…少しだけ待っててて…。

「貴女の集めてきたジュエルシード八つ、これじゃ足りないの。
手に入れてきて…母さんの為に」

＝＝＝

リンディさんに一晩考えるように言われたけど、
レイジングハートの持ち主であるユーノくんとは相談しておいた方がいいと思うの。
だからこうして家に入れているんだけど…
ユーノくんはフェレットっていう小動物に変身できるみたいで、
そっちの姿でないとお父さんたちに何だか言われそうだから…こうして変身してもらっています。

何だか、キュゥべえと一緒だった時のことを思い出すなぁ…

「ユーノくん、わたしね…レイジングハートと一緒に、ジュエルシード集めを手伝いたい」

わたしは包み隠さず、本当のことを言う。
もう何も隠すような理由なんてないはずだから。

「わたしはやっぱり、もっとフェイトちゃんに会いたいんだ。
会って、話をして…いつかは友達になりたい。
それとね、管理局の人たちは…わたしをキュゥべえから助けてくれたってことだよね？
だからこの人たちの役に立てるなら、それは…とっても嬉しいなって思うの」

「キュゥべえ…インキュベーターの事だよね？
そういえば初めて会った時は、ジュエルシードに襲われていたんだよね」

この言葉を聞いて、わたしはふと思ったの。
キュゥべえは悪いことをしていたけど、
ジュエルシードには、偶然巻き込まれて迷惑していただけなんだっ

て。
でも…わたしにはもう、素直にキュゥべえを信じていいのかが分からないよ。
「うん。わたしはキュゥべえと契約してジュエルシードと戦ってたんだけど…
魔女になる心配なしに、今日こうして戦えたんだ」
「なのは…僕は、これからも君に戦ってほしい。
恥ずかしながら、僕にはレイジングハートを使いこなすことはできなかった。
でもなのはは…初めてのデバイスなのにあそこまで巧く戦えていたんだ。
僕の手にあるより君と一緒の方がレイジングハートは幸せなのかもしれない…。
だからお願い。これからもレイジングハートとともに、
ジュエルシード事件に終止符を打ってくれないかい？」
返事はもう決まってる。
これは、新しいわたしの始まりなんだ！
「もちろんっ！レイジングハートも、これからよろしくね。
これから色々、戦い方を練習していくから」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ」
マイマスター…レイジングハートが私を認めてくれた！
がんばらなくっちゃ！

「…だから、今後はなのはも一緒にそちらに協力させていただきたいと。
彼女の魔力はそちらにとっても有効な戦力だと思います。
ジュエルシードの回収、あの子たちへの牽制、魔法少女や魔女との接触…
いずれにしても、そちらとしては便利に使えるはずです」

「お願いします、どうか協力させてください！」

「協力ね…中々考えてはいるようなんだけど」

管理局側としては、本当は部外者の協力はできるだけ抑えておきたいはず。
だからとりあえず現在アースラに所属していることになっているユーノくんにも、
お願いに協力してもらいました。
リンディさんたち、受け入れてくれるかな…

「ふむ…まあいいでしょう」

「え！？…か、艦長！？」

やった！意外にもあっさり受け入れてくれた！
クロノくんはちょっと嫌そうだけど…

「なのはさんの能力は本物だわ。

それにフェイトちゃんも、何回も戦ったなのはさんになら
心を開いてくれるかもしれないし…
元魔法少女ならインキュベーターについても上手く説明できそうですしね。
手伝ってもらいましょう。切り札は温存しておきたいものね、クロノ執務官」

「は、はい…」

「というわけで、只今をもって臨時の協力者として、
ジュエルシードの発掘者・ユーノに加え、
現地の魔導師・高町なのはさんがアースラのクルーとなります」

「よ、よろしくお願いします！」

こうしてわたしは、しばらくアースラで働くことになったの。
数日家を空けることになるので、家族や学校、アリサちゃん達にはちゃんと説明しておきました。
というわけで小さな集会が終わり…
ジュエルシードや魔法少女の捜索はエイミィさん達がやってくれるみたいなので、わたしたちは待機中。

でも、その間もきちんと特訓しておかないとね。
まずはユーノくんから、ミッドチルダの魔法の基本を教わっています。

「僕やなのは、魔導師達の胸の奥には『リンカーコア』っていう魔力の生成器官がある。
リンカーコアで呼吸して、空気中にある魔力を集めて固めるようなイメージで…
これが、魔力運用」

「すぅ…、はぁ…」

最初のうちはまだ違和感があるの。
だけど、これからはこういう呼吸が当たり前になってくるから、慣れておかないと。

とりあえず、リンカーコアでの呼吸には慣れました。
次はレイジングハートに空中での戦い方を学びます。

「Ｃｏｍｍｅｎｃｉｎｇ　ｉｍａｇｅ　ｔｒａｉｎｉｎｇ」

空中で自由に動く方法そのものは、魔法少女だった時の経験があるから問題はないみたい。
だから、効果的・戦術的な動き方をイメージトレーニングで学習します。
魔導師にとっては、動いたり攻撃を避けたりしながら魔法を使う事が多いから、

何かをしながらのイメージトレーニングは結構効果的らしいの。
というわけで、持ってきておいた教科書で学校の勉強をしながら、レイジングハートの指導を受けています。

「Speed and power are essential in combat, but there are more important things.
Do you know what it is?」

レイジングハートが言うには、
戦闘にはスピードとかパワー以外にも重要なものがあるみたいです。

「うーん…、負けないって気持ち、とか？」

「Good answer, but what else…wisdom and tactics」

知性と戦術…？
つまり、頭を使って戦うことが重要なのかな？
と思うと、空中にいるわたしの周りにいくつものターゲットが出てきた！
あくまでイメージですけどね…

「How to fly and shoot, and the theory and practice of aerial combat…
I will teach you these things」

えーっと、飛び方や撃ち方、空中戦での動き方かー…。

なんだか難しそうだけど、頑張らなきゃ！

そんなこんなで、わたしの実力は確実に上がっていってる。
自分でもどんどん強くなっているのが分かります。
やっぱり本格的なトレーニングをやると違うなぁ…。
そして三日目。ようやく実戦！
今は海鳴市から結構離れたところで、鳥に憑いたジュエルシードと戦っています。

「Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　Ｌｏｃｋ」

今回の相手は素早く動くけど、
ユーノくんが作ってくれた隙を突いて、バインドをかける！

「ゴロロロロロロ…！」

「そう！バインドをうまく使えば、動きの速い相手も止められるし、大型魔法も当てられる！」

わたしはまだ戦いの経験が浅く、高速飛行にもあまり慣れていないの。
だから、自分の高い魔力を活かした大威力砲撃をメインに据えた戦術が向いているみたい。
そういえば…ミッドチルダの魔法は『非殺傷スタン設定』っていうのがあって、
これを使えば殺さないようにダメージを与えられるみたいだから、
人に対して使ってもいいって聞いたしね。

こうして戦闘の流れを覚えながら、得意のパターンに持っていく方法を探す！
これで、今度フェイトちゃんに会ったら…。
「ディバイーン、バスターッ！！」

「お疲れ様。うーん、本当に優秀ねぇ…」
「あ、ありがとうございますっ！」
アースラに戻ると、早速リンディさんが褒めてくれた。やったー！
クロノくんはなぜかこっちを見たがらないみたいだけど…
こうしてわたしは、用意してもらった自室に戻る。その途中…
「あ、あの…なのはさん…でしたよね？」
知らないお姉さんから声をかけられる。見た感じ十三歳くらいかな？
十三歳くらいの女の子…あれ？なんだか心当たりが。
「…ひょっとして、アースラに保護してもらった魔法少女の…確か、千夏さんですか？」
「ああっ！知っててくださったんですか！？ここ、光栄ですっ！！」

なんだかこんな態度をされるとものすごーく調子が狂うよぉ！
しかも相手は、いくつか年上のお姉さんなのに…。

「あのっ…管理局で働くことになったって聞いて…分かれ際に是非ともあいさつしたくて…！」

「え、と…なんだか調子狂うから、そういう話し方はちょっと…」

うわ、わたし生意気なこと言っちゃったかな…。

「あ、ごめんなさい…すー、はー…」

やたらと緊張しているっぽい千夏さん。
呼吸を整えるのに一分くらいかかってる…

「えっと。なのはさんは、どうして魔法少女に？」

やっと落ち着いたみたい。これでこっちも安心して話せるね。

「うーん…今管理局がジュエルシードというものを集めていますよね。
わたし、あれに襲われているキュゥべえを見つけちゃって…
その場の勢いで、願い無しで契約しちゃいました」

「願い無し…。
なのはさん、もしかしたら、それが一番よかったのかもしれません」

え…？
魔法少女としては、何にも願わない方が得なの？

「私、小さいときから書道ばかりの生活でした。
だから友達が全然いなくて…キュゥべえに”友達がほしい”って願ったんです。
すると次の日から、少しずつ友達が増えていきました。
はじめての友達との遊び、お出かけとか買い物…本当に、あの時は幸せでした」

そうか、この人…友達がいなくてキュゥべえにお願いしたんだ。
わたしもわりと最近まで一人ぼっちだったし、その気持ち本当によくわかる。
もしまだ一人ぼっちだったら…キュゥべえに友達をお願いしたかも。

「でも、いつでしたか…友達と遊んでいるときに、手を怪我してしまったんです。
軽い怪我でしたが、両親がこのことを知った時…私は、家に閉じ込められました。
書道の邪魔をするクズなんて要らないって」

一瞬わたしは千夏さんの話が信じられなかった。
友達が、書道の邪魔をするだけの、目障りな存在って…！
私が何も言えないまま、千夏さんは続ける。

「そしてある時、私に会いに来てくれた友達が…両親に殺されました」

！！！！！！

「う、嘘…ですよね…？」

嘘であってほしかった。
こんなに酷い親がいること、それ以上にキュゥべえへの祈りが悲しみを呼び寄せたこと…！

「これを知って自暴自棄になった私は、魔法の力を使って無理やり家を出たんです。
それから町の中をさまよっていて、管理局の職員さんが見つけてくださいました。
もう少し遅かったら、魔女になっていたかもしれなかった…」

言葉が、出ない。
こうして絶望することが、どれほど悲しいか…実感がない自分が情けないの。

「たくさんの魔法少女が自分の願いに裏切られ、魔女になると聞きます。
安易に奇跡を頼ったりしても、結局その代償は…
願った希望の分が絶望となって還ってくるんですね」

＝＝＝

いつも傍らに居てくれたアルフ…
私の事を励ましてくれたアルフ…

いなくなって、初めてかもしれない孤独を味わっている。
ジュエルシードさえ集めれば…母さんの夢さえ叶えば、
母さんが孤独をいやしてくれるはず…

ふと、いつもの白い子が頭に浮かんだ。
何故だろう…、その子のことを考えると、孤独の痛みがちょっとだけ和らぐ気がする…

＝＝＝

ごめんね、フェイト…

「あ、あれ？…何よあんた！」

＝＝＝

次の日、わたしは久しぶりに学校に行きました。

「なのはちゃん…！よかった、元気で」

「うん、ありがとうすずかちゃん。アリサちゃんも、ごめんね…心配かけて」

「…まあ、よかったわ。元気で」

すずかちゃんもアリサちゃんも、いつも通りで安心。

本当に心配かけちゃったなぁ…

「そっか、また行かないといけないんだ…大変だね。放課後は、一緒に遊べる？」

「うん、放課後なら大丈夫」

「じゃあ…うちにくる？新しいゲームもあるし」

というわけで、アリサちゃんのうちに遊びに行くことになりました。

「…そういえばね、夕べ、ケガしてる犬を拾ったの。

すごい大型で、毛色がオレンジで、見たこともない種類。
おでこにね、こう…赤い宝石がついてるの」
アリサちゃんが話す犬の特徴には、心当たりがあった。
まさか…それって…！

アリサちゃんの家で拾われたという犬は、やっぱりアルフさんだった。
「（やっぱり！酷いケガ…）」
「（アンタか…）」
どうしたんだろう、そのケガ…。それと、フェイトちゃんは…？
「（なのは、彼女からは僕が話を聞いておくから）」
フェレットになってついてきたユーノくん。
きっとわたしに気を使ってくれてるんだ。ここは甘えておかないと。
「じゃあ…みんなでおやつにしましょう！」

「（アンタがここにいるってことは、連中も見てるんだろうね）」
「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。正直に話してくれれば、悪いようにはしない。
君の事も、君の主の事も」
「（…話すよ。全部）」

「（なのは、聞いてたかい？）」
「（うん、全部聞いた）」
アルフさんと、ユーノくんや管理局のみなさんの会話はテレパシー…『思念通話』だったから、
わたしにも聞こえていた。
今もこうして、わたしはユーノくんやクロノくんと思念通話で話してます。
「（僕らは、プレシア・テスタロッサの捕縛を最優先事項として動くことになる。
君はどうする？高町なのは）」
もう迷いは消えた。
わたしは、心に決めたことを伝える。
「（わたしは…フェイトちゃんを助けたい。

友達になりたいって伝えたその返事も、まだ聞いてないしね）」
これでいいの。
プレシアさんの望みは叶えてあげられないけど、
フェイトちゃんには、もっと幸せになってほしいから。
「（そうか…アルフ、それでいいか？）」
「（うん…。なのは、だったね？
頼めた義理じゃないけど、だけどお願い。フェイトを…助けて）
」
「（だいじょうぶ。まかせて）」
アルフさんだって、フェイトちゃんの事をこんなにも大切に想っているんだ。
だからもう無理はしないでいいんだよ、フェイトちゃん…
「遅いよなのは！新しいとこに進むの、待ってたんだからね！」
アリサちゃん達には、トイレに行ったと言ってあります。
わたしのために、ゲームを進めるのを待っててくれたんだ…
こうして、しばらくアリサちゃんやすずかちゃんと遊んだのでした。
「（フェイト救出の作戦はどうする？）」
「（…いちおう、考えてることはあるんだ…）」

第七章「そんなの、わたしが許さないの」（前書き）

第七章。

正史では物語屈指の名場面、なのはとフェイトの決戦。
でもこの物語では…ぶっちゃけそれどころじゃなくね！？

第七章「そんなの、わたしが許さないの」

そして、次の日。
辺りには、海に半分浸かった無数のビルと、それを取り囲む広大な海。
わたしはクロノくん達に戦える場所を作ってもらって、そこでフェイトちゃんが来るのを待ってます。
残りのジュエルシードを手に入れるためには、わたしと戦わないといけないから…
だから、わたしは待ち構えているの。
だけど、最初に来たお客さんは予想外のものでした。

「って…キュゥべえ!?どうしてここに…」

「やあなのは、久しぶりだね。管理局の魔導師になったのか…
だったら僕達インキュベーターのことも聞いたんだろう？」

そう、キュゥべえが来てしまったの。
堂々と出されたセリフから、管理局のキュゥべえに関する情報は正しかったと感じられる。

「たまたま素質のある子を見かけて後を追っていたら、いつの間にかこんなところに出てきたんだよ。
まあ…管理局に処理された君とは、再契約は不可能なんだけどね」
たとえ可能でも契約なんてしないよっ！今は魔法の力も使えるし…
そんなことより、わたしにはキュゥべえに聞きたいことがある。

「…キュゥべえは、いつから地球に居るの？」

「その様子だと、管理局は地球の事は把握していないようだね。
まあばれたとしても、そう簡単に見つかったりはしないけど…とりあえず、質問には答えよう。
僕達が宇宙に散らばったのは、まだ地球人が出てくる前さ。
地球人と契約するようになったのも有史以前。それ以来、僕達と君達の関係は続いてきた」

…管理局の魔導師として全てを知ってからキュゥべえと話すと、なんだかこの小動物がやたら胡散臭く思えてくる。

「魔法少女は…例えばジャンヌダルク。彼女の他、歴史に名を残してきた少女が多くを占める。
僕達としてはそういう大きな因果を宿した子の方が、効率的にエネルギーを回収できるしね。
君の場合は…管理局にとっては強力な『魔力』を秘めた人材だね。
君には、これから管理局の中でも強力な魔導師となる可能性がある。
近いうちに君は多くの世界で活躍するだろう。これもまた、大きな因果と言えるね」

ジャンヌダルク…確かその人は、フランスを救った英雄。
その後、国に裏切られて”魔女”として処刑された…

「ジャンヌの場合は助けた祖国に裏切られて悲惨な末路を遂げたけれど、
所詮はただの農民あがり。そんな彼女が国を救うという大き過ぎる希望を抱いたんだ。
身の丈に合わない希望は、経過はどうあれ…いつかは絶望になる。

これが嫌なら、そもそも希望なんて持つべきじゃないんじゃないかな」

話を聞くうちに、キュゥべえの言葉が残酷なものになっていく。
やっぱりわたしたちは、キュゥべえの餌でしかないの…？

「それでもジャンヌの精神は強かった。最後まで魔女にならずに、”魔女”として殺される運命を受け入れたからね。
僕としてはエネルギーを回収できなかった失敗例だけど」

「もう黙って」

わたしはたまらず言い放っていた。
これ以上こいつの言葉に耳を傾ける意味なんてない。

「どこかに行ってよ。そして二度とわたしの前に来ないで」

「やれやれ…」

希望を抱くことは間違いだって言うの？
みんなを助けたい…そう思った子を、最終的に人々を襲う事になるようにしたのも、インキュベーター！
あなたたちこそが、希望を踏みにじってるの…！

「（全く、人間はいつもそうだ。
僕の目的や魔法少女の真実を知るとすぐに非難する。

宇宙の寿命が伸びないと君たちにとっても損のはずなのにね。
それに最初から僕達がいなかった場合、
君達は今もなお原始的な生活をしていた可能性だって大きいし。
まあ…今はそんなことどうでもいいか。次の魔法少女と契約する機会を窺わないと…）」

たとえ希望は絶望になる運命だったとしても…そんなの、わたしが許さない。
絶対に、わたしの戦いを絶望で終わらせたりなんかしないっ！

「ここならいいよね…出てきて、フェイトちゃん」

やっと、待っていた気配を感じた。
わたしが呼ぶと、それはすぐにわたしの前に現れる。

「（フェイト、もうやめようよ！これ以上あの女の言いなりになってたら…）」

「（だけど…それでも私は、あの人の娘だから！）」

一緒に来ていたアルフさんが呼びかけるけど、意志を曲げないフェイトちゃん。
こういうやりとりが、一体何回あったのかな…

「フェイトちゃんは立ち止まれないし、わたしはフェイトちゃんを止めたい。
きっかけは…ジュエルシード」

わたしの作戦。
管理局としてはあんまりいい案ではないのかもしれないけれど、
クロノくん達にもこの考えには利用価値があったみたいで、許可してくれた。

「Ｒｅｌｅａｓｅ　Ｊｅｗｅｌ　Ｓｅｅｄｓ」

だから今、こうして十二個のジュエルシードを持ってきている。

「だから、賭けよう。お互いが持ってる全部のジュエルシードを。
それからだよ、全部…それから。わたしたちの全ては、まだ始まってもいない。
だから…ほんとの自分を始めるために…」

そう。わたしは…絶対に、フェイトちゃんと友達になってみせる。
一緒におしゃべりしたり、笑いあいたい！

「始めよう。最初で最後の、本気の勝負！」

＝＝＝

「エイミィ、戦闘空間の固定は大丈夫かい？」
僕達管理局の手による空間だから、そうそう心配はないと思うけど…インキュベーターが巻き込まれていたこともあるし、念には念を入れないと。

「うん。上空まで伸ばした二重結界に戦闘訓練用のレイヤー建造物。少なくとも地球人の誰にも見つからないし、どれだけ壊しても大丈夫。」
しかし…ちょっと珍しいね。クロノくんがこういうギャンブルを許可するなんて」

「なのはが勝つに越したことはないけど、勝敗はどう転んでも関係ないしね」

今回の作戦の内容…
なのはが戦闘で時間を稼いでいるうちに、エイミィ達にフェイトの帰還先追跡の準備をしてもらう。
例えフェイトが勝ったとしても、アースラの全兵力を投入してプレシアを叩けばいい。
この作戦の為、魔法少女関係の仕事は一旦休止。

「頼りにしてるんだ、逃がさないでくれよ」

「了解！…でも、なのはちゃんに伝えなくていいの？プレシア・テスタロッサの家族と、あの事故の事…」

「ああ、いいんだ」

勝ってくれるに越したことはない。今は、なのはを迷わせたくないんだ…

＝＝＝

「甘いよっ！」

しまった、上から回り込まれた！

「Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ」

「シューート！」

後ろからの射撃。速度可変の誘導弾…！
避けつつ距離をとる…余裕を持って、

「Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ」

「ふんっ！」

斬撃一閃、誘導弾破壊！
このまま近づいてクロスレンジに持ち込む！
相手の残弾を避けつつ、鎌で斬りかかる。
敵はシールドを張ったけど、こんなもの…押し切る！

「…後ろもらったよ！」

突然の意味深な発言。
後ろから光の弾が！さっき避けた分！？
…それなら、早い所処理するまで！

「Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｂｕｌｌｅｔ」

貫通力の高い『サンダーバレット』で、さっさと相手の防御を抜く！

撃ち落とされる白い子。こうなれば誘導弾など当たらないも同然。
あらぬ方向に落ちていく敵の誘導弾。あの子は…海中？

「はぁ…はぁ…、」

様子を見る…しばらくして、あの子の落ちたあたりからぼんやりと
桜色の光が…
海中から攻撃！？

「…ッ！！」

何とか避けたけど、危なかった…。

この子、どう考えても今までより確実に強くなってる。
管理局に正式な訓練を受けたからかな…。
でも、こっちとしても負けられない。

母さんのため…そして、この子との決着をつけるため！

＝＝＝

やっぱり実力はフェイトちゃんの方が上。
そうだよね、魔導師の経験は段違いだもん。
でもわたしだって、負けるわけにはいかない。
知恵と戦術はフル回転中。切り札だって用意してきた！
だから、後は…

「負けないって気持ちで向かっていくだけ！…でしょ？」

「…Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，　ｍａｓｔｅｒ！」

こんどはこっちが追いかける番！
何度も激突して勢いを殺されるけど、こっちも高速射撃でフェイトちゃんを牽制！

「シュートッ！」

ビルのそばに追い詰めながら撃って、高高度に逃げさせる…そしてまた追撃！
わたしはフェイトちゃんと戦うために、空間の使い方を練習していたの。
スピードでこっちに勝るフェイトちゃんに追いつくために、
相手に速度を無駄使いさせたり、わたしを中心に回らせるような撃ち込み方を考えたり…
だからなんとかついていけてる。

わたしたちは、どんどん上昇していつの間にか雲の上まで来ていた。
「いっけーっ！」
こんどは数発の誘導弾をまとめて直射。でもこんなものを避けられないフェイトちゃんではない。
紙一重でわたしの弾を避けて、空気抵抗で移動の勢いを殺すことで減速…”エアブレーキ”で後ろに回ろうとする。
狙い通り！
「んなっ！？」
急に減速したフェイトちゃんを襲う数発の弾！
わたしが撃った弾塊は、狙ったところで無数に散らばる拡散弾。
エアブレーキ中なら、そう簡単に回避動作もとれない！
「がっ…！」
不意打ちを受けて、雲の中に突き落とされるフェイトちゃん。
さらに数発の小型弾、ディバインシューターで追撃！
視界が悪いからロックオンマーカー頼りのブラインドショットだったけど、
これは簡単にはやり過ごせないはず！
わたしも初めてフェイトちゃんに会った時、こうやって撃ち落とされている最中に射撃を受けた。
あのときの仕返しだね…と思っていたら！
「…！？」

黄金に輝く光の刃がわたしの弾を蹴散らしてこっちに来る！
高速で直進してくる刃、わたしは紙一重でこれを避けて…
違う、思い出した！

（ドカァァァーーーーーーン…）

フェイトちゃんの技『セイバーエクスプロード』。
飛ばしてきた光の刃を爆発させる技！
思えば、初めてのときにわたしを撃ち落とした技もこれだったっけ…。
だけど、同じ手は食わない。ちょっと距離をおいてシールドを張り、衝撃を最小限に抑える。
どうにか吹き飛ばされずにすんだ…

「…！！」

しかしすぐさま雲の中から連続光弾！
向こうからもこっちは見えないから、雲に沿って飛んでいれば当たらないけど…
だんだんと精度が良くなっている。近づいてるんだ！

「やああーーーーーっ！！」

雲から飛び出し、鎌をふるうフェイトちゃん！そのままクロスレンジの戦闘になる！
近接戦ではこっちが不利だけど空中だと自由に動けるから、
避けてしまえば、意味がない！
お互いが武器を振りかざす、避ける、振りかざす、避ける…
だめ、避けられないっ！

「てぇぇぇぇーーーいっ！！」

ならばこっちも急加速して、フェイトちゃんをその勢いで突き離す！
わたしたちは勢いがあるまま、間合いだけが離れる。そのままお互いに急接近…
激突、激突、また激突！
三回目の激突でふたたび一気に突き放す！

「はぁっ…はぁっ…」

疲れてきた。いったん態勢を整えなきゃ…

＝＝＝

気を奮い立たせ、再び突進。
何回も激突して…最終的にお互いの勢いが殺され、鍔迫り合いの形に。
あの子が態勢を崩した！そのまま押し切る…しかし結局杖で防がれた。

「Ｇｒａｖｅ　Ｆｏｒｍ」

バルディッシュ・グレイヴフォーム…これは全てを貫く槍。意志を貫く槍！
あの子に全速力で突進する。シールドを張られたけど、
こんなもの、突き破ってみせる…！

私がまだ小さい頃、母さんと二人でピクニックに行った時のことが頭に浮かぶ。
あの時私達は仲良くサンドイッチを食べていたっけ。
母さんは、確かに笑顔だった…。
もし勝てなかったら、そんなあの頃に戻れなくなる…！

「ママ…きょうもおしごと、おそくまで？」

「ごめんね…」

「ママ…いつまでいそがしいの？」

「来週実験があってね、それがすんだら少しお休みをもらえるわ」
「…そしたら、またピクニックにいける？」
「うん、約束よ」

わがままを言って、母さんを困らせてばかりだった。
あの日の事故の直前までは、はっきり覚えてるんだ…。

その時、幼い私は母さんの働く施設を家から見ていた。
そして突然、母さんのいた場所が遠くで光った…。

次に目が覚めた時に見たのは、泣きながら私を見ている母さん。
私はあの事故でけがをして、ずっと眠っていたんだって…

「ほら、ここがあなたのお部屋。
　しばらく体を休めて元気になったら、ピクニックでも遊園地でも、どこにでも連れて行ってあげる」
「うん…でもおしごとへいきなの？」
「平気よ、もう平気なの。大丈夫よ、『アリシア』」
アリシア…？

「どう？アリシア…、おいしい？」

違うよ、母さん…。
私は、『フェイト』だよ…。

一瞬の迷いが、集中力を鈍らせた。
結局私の攻撃は、バリアから逸れて大きく離れた…。

違う、どっちでもいい！
勝つんだ…！勝って、母さんの所に…帰るんだっ！
私の最高の技…これで一気に決める！

私の両横、遥か遠くまで陣を組むように無数のスフィア（光弾）を生成する。
あの子も私が大魔法を使うことを察したみたい。だけど既にバインドの準備は終えている！

「ッ！？」

これであの子は行動を起こせない。
一瞬足元に違和感を感じたけど、気にしてはいられない！

「設置型のライトニングバインド…。フェイト、まさか…！」

そう、そのまさかだよアルフ。

ここで勝負を決めて、一緒に母さんのもとに帰ろう！
母さんと、また楽しくピクニックに行くんだ…！

「フォトンランサー・ファランクスシフト…。撃ちぃ、砕けぇぇぇぇぇーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！！」

横に構えた無数の光弾から、一斉に連続射撃を放つ！
高圧縮魔力弾の雨あられ…その全てが、一直線にあの子のもとへ！
バインドで動きは封じてある。全弾命中している！
くっ、きつい…でも負けられないんだ！
左手を高く掲げ、残ったスフィアを集めて固めて…光の槍を生み出す！
そして…

「スパーク…」

…投げるッ！！

「…エンド」

激しく広がる雷電の爆発、めくれる海…！

「はぁっ…、はぁっ…」

これで、決着がついたよね…。
私、勝ったんだよね…？

「Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｍｏｖｅ？　Ｍａｓｔｅｒ」

「いけるよ、レイジングハート！」

「Ｃａｎｎｏｎ　Ｍｏｄｅ」

そんな、まだ戦えるなんて…！

「う、うわあああああああああああああっ！！」

やけになって突撃しようとする…、しかし動けない！

「…バインド！？いつ…はっ！」

まさか、あの時足元に感じた違和感って…これか！
あの子は銃に変形した杖を構え、激しく魔力を集めながら私を狙っている！
そうか、このために…

「ディバイィィィィーーーーーーーーーーーーーン…、バスタァァァァァーーーーッ！」

押し寄せてくる桜色の光の奔流！
本能的に…奇跡的にもバインドを逃れていた左手を出し、シールドを張る。
その直後、砲撃が命中した！

「ぐぅぅぅ…ッ！ぅぅぅぅ…ッ！！」

止まらずに襲いかかる光！
本当は私、防御に関しては弱い。きっとあの子の方が、シールドの強度は上だろう。

…でも、あの子だって耐えたんだ。それにもう限界のはず…これを、耐え切れば…ッ！！

「ふっ…ぐ…！…ぁあああ…！！！」

攻撃が、止んだ…。
耐えた…、耐えたんだ…！これで…

…？
私の周りから、無数の光の粒子が立ち上る…。
程なくして上空が光を放つ。思わず見上げると、そこには…
眩しく輝く一つ星。立ち上る光の粒子は、あそこに集まっていく…？

「まさか…、集束、砲撃…！？」

＝＝＝

「う、うおおおおおおおおおおおおおおおおああああああああああああ！！！」

フェイトちゃん…ラウンドシールドを五重に張る！
わたしの切り札、受け切るつもりなんだ！
…これが最後の勝負！守り切るか、貫くか…！

「スターライトォォォォォーーーーーーーーー…、ブレイカァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

＝＝＝

ぼんやりと意識を取り戻すと、そこは海中。
そうか…。私、あの子に負けたんだ…。

母さん、ごめんなさい…。私、母さんの望み…叶えられなかった…。
本当に…、ごめんなさい…

「（諦めたらそれまでだ。
けど、君なら運命を変えられる。
避けようのない絶望も、嘆きも、全て君が覆せばいい。
そのための力が、君には備わっているんだ）」

誰…？
どこかで聞いたことのあるような声がする。
その言葉は、確かに希望の色をたたえていた。

「（本当なの？…今の私でも、まだなにかできるの…？）」

「（もちろんさ。さあ、願いを言うんだ。
その願いをかなえるため…僕と契約して、魔法少女になってよ！）」

願いを、叶える…？

もう、どうなってもいい。
母さんの望みがかなうなら…
また、昔の母さんに戻ってくれるなら…！

「（私は…、母さんの望みを、叶えたい！）」

「（君の願いはエントロピーを凌駕した。契約は成立だ。君は”想いを通す力”を得た。
その力は全てを貫く。さあ、解き放つんだ）」

母さん…。
私は、この力を使います。母さんの想いを通します…！
これで、いいんですよね…っ！！

＝＝＝

それでも…ずっと待ち望んでいた光景があった。

「…！！」

第八章「もう何も恐くないの」（前書き）

第八章。

正史とのずれが顕在化。

正史には無い、もうひとつの陰謀は…留まるところを知らない。

第八章「もう何も恐くないの」

はぁっ…、はぁっ…、フェイトちゃんは…？
大変！海に落ちていってる！助けなくちゃ…！
海中から一瞬光が見えた。あそこにフェイトちゃんが！
わたしはすぐに潜っていく。水中の移動は鈍いけど、急がないと…。

「…はっ！」

よかった、目を覚ました…。
海底の近くまで沈んでたから、結構長い間水中に居たみたいで…不安だったの。
でも生きてて本当によかった…。さっきの砲撃はちょっとやり過ぎたかも。

「フェイトちゃん…ごめんね。大丈夫？…動ける？」

何とか立ち上がるフェイトちゃん。
無言で飛び去っていく…。ジュエルシードは、プレシアさんが持ってるのかな？

「高次魔力確認！魔力波長は…プレシア・テスタロッサ！戦闘空域

に、次元跳躍攻撃…！」

エイミィさんの突然の連絡！
そして…黒く染まる空、轟く雷鳴、駆ける紫電！
あの時と同じだ…！

「母…さん…！？」

フェイトちゃんがつぶやく…やっぱりプレシアさん！
空を見上げるフェイトちゃん、その真上で…ひときわ強い紫洸！

「フェイトちゃーーーーーん！！！」

よかった、間に合った！
ギリギリのところで助け出せたから、なんとかあの雷を受けずに済んだ…。
フェイトちゃん…気絶してる。やっぱりショックだよね…

「魔力発射地点、特定！空間座標…、確認！…転送座標セット！」

「突入部隊、転送ポートからプレシアの屋敷『時の庭園』へ出動！
任務は…プレシア・テスタロッサの身柄確保です！」

＝＝＝

＝＝＝

母さんの望みは叶ったはずなんだ…。
あのときの攻撃は、ジュエルシードを奪えなかった私への罰に違いない。
悲願が叶ったと分かったら、きっと昔の優しい母さんに戻ってくれる…！

「プレシア・テスタロッサ！時空管理法違反、及び管理局艦船への攻撃容疑で、貴女を逮捕します！」

程なくして管理局のモニターに母さんの玉座が映った。
母さんは今、武装した多くの管理局員に取り囲まれている。でも余裕の表情。追い返す自信があるのかな…？
管理局員の一部が、玉座の奥にある母さんの研究室や私室に向かう。

「！？」

母さんの目つきが変わる！
モニターが研究室、そして母さんの私室を映す。
私は玉座から先には入ってはいけなかったから、この二つの部屋を見るのは初めてだった。
研究室の方には、壊れた巨大な培養筒。
そして、私室は一見何の変哲もないベッドルームだった。
その部屋のベッドに、

「「え…！？」」

私と瓜二つの、幼い少女が眠っていた…！

「この子は…？」

「私の『アリシア』に…、近寄らないでぇぇぇぇぇ！！！！！」

アリ…シア…！！

「局員がプレシアの攻撃を受けました！ほぼ全滅！」

「フェイト…ちゃん…？」

「やっと終わりにできたのに…！この子を亡くしてからの時間も…
”この子の身代わりの人形を娘扱いするのも”」

私が…あの子、アリシアの…身代わりの人形…！？

「聞いていて？貴女のことよフェイト。
折角アリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ…。役立たずでちっとも使えない、私のお人形」

役立たずの人形…。
管理局の職員が、説明を加える。

「最初の事故のときにね、プレシアは実の娘…アリシア・テスタロッサを亡くしていたはずなの。
安全管理不慮で起きた魔導炉の暴走事故。アリシアは、それに巻き込まれて…。
その後プレシアが行っていた研究は、使い魔を超えた”人造生命”の生成。そして、死者蘇生の技術…」

「記憶転写型特殊クローン技術『プロジェクト・フェイト』…！」

「そうよ…その通り。でも、失ったものの代わりにはならなかった。作り物の命は、所詮作り物…！
貴女はアリシアとは違う。利き腕も、魔力資質も、人格さえ…！
アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。わがままも言ったけど、私の言う事をとてもよく聞いてくれた。
アリシアはいつでも私に優しかった！」

所詮、作り物…。
母さんの望みは、本当のアリシアを蘇らせること…。
つまり、私と決別すること…！

「死者蘇生なんて、どんな魔法でも不可能なはずなのに…！何故生

き返ってるんだ…！」

「奇跡が起きたのよ。何かを感じてアリシアの体を見てみたら、あの子は眼を開けていた。
アリシアはまた生き返ってくれた…！
どうしてなのかは分からないけど、これで私の夢は叶った。だから…貴女は”用済み”なのよ」

私の願いが、アリシアを生き返らせて…そして私は、用済み…！

「フェイト、貴女は私の娘じゃない。ただの失敗作。
それに…アリシアもこうして蘇った。だから貴女はもう要らないわ。
どこへなりとも消えなさい！！」

私は失敗作…、要らないもの…！
それじゃあ私は、何のために…！？母さんに認めてもらいたかっただけ…なのに…！

「いいことを教えてあげるわフェイト。貴女を作り出してからずっとね…」

そして、私が一番聞きたくなかった言葉が…母さんの口から、紡がれた。

「…私は”貴女が大嫌いだったのよ”」

＝＝＝

まさか…アリシアちゃんが生き返ったのって…！

――…たまたま素質のある子を見かけて後を追っていたら、いつの間にかこんなところに出てきたんだよ…――

フェイトちゃんを助けた時の、海の中の光…。
あれは、キュゥべえとの契約の光だったんだ…！

「間に合った…！フェイトは魔女にならずに済みそうだ。誰か、ソウルジェム浄化の手段は！？」

「はい、なのはさんのジェムの残骸を使えば浄化は可能です！」

わたしが勝った時、フェイトちゃんはきっと絶望していた。
大好きなお母さんの夢を叶えられなくて。
その時にキュゥべえが現れたら…、わたしだったらきっと、藁をもすがる思いで契約したと思う…。
でも…

――…安易に奇跡を頼ったりしても、結局その代償は…願った希望の分が絶望となって還ってくるんですね…――

――…身の丈に合わない希望は、経過はどうあれ…いつかは絶望になる…――

キュゥべえ…。これが、運命だというの？
希望は人を裏切るのが真理なの！？

どうして…！

いきなり、画面が騒がしくなる！

「ちょっ…大変！見てください！屋敷内に魔力反応多数！」

「魔力反応、いずれもＡクラス！総数六十…八十…まだ増えます！」

画面内、プレシアさんの屋敷に無数の…ロボットが現れる。
これは一体…？何をしようとしているの…！？
そんな混乱に追い打ちをかけるような、激しい震動！

「じ、次元震です！ジュエルシード九個発動、更に強くなります！
波動係数拡大、このままだと次元断層が…！」

「プレシア・テスタロッサ…一体何をするつもり！？」

「私達は旅立つの。
誰にも邪魔されず、ずっとアリシアと一緒に居られる永遠の都へ…！
このジュエルシードの力で旅立って…取り戻すのよっ！…全てを…！」

全てを、取り戻す…？
これ以上何をするというの…？

「次元震、震度徐々に増加中！
庭園の駆動炉が異常稼働！駆動炉を暴走させて、出力を上げようとしてる…！？」

わたしは…プレシアさんに文句を言わないと気が済まない。
それに、時の庭園も止めないと大変なことになりそう！

「リンディさん、わたしも出動します！」

「「僕もだ！」」

二人の声が重なる…ユーノくんとクロノくんだ！
それに気づいたリンディさんは…

「私も後から出るわ。庭園内で次元震の進行を抑えます。

では…高町なのは、ユーノ・スクライアー、クロノ・ハラオウン…プレシア・テスタロッサの逮捕を！」

「「「了解っ！！！」」」

時の庭園に入ったわたし達。
長い廊下を抜けると…さっきのロボット達だ！わたし達を迎え撃つ気…！

「…二手に分かれる。君たちは、最上階にある駆動炉の封印を。僕は…プレシアを止めに行く！」

クロノくんが提案する。
でも、これってつまり…クロノくん一人で行動するってことだよね？

「…今から、道を作る！ブレイズキャノンッ！！」

クロノくんの砲撃！
あっというまに、ロボットたちの間に道ができていた…。
クロノくんすごい！これなら一人でも安心…だよね？
わたしたちはすかさず、駆動炉に向かう。

「クロノくーん、気をつけてねー！」

‖‖‖

あんなの、だいじょうぶなわけがない！
ママはきっとひどいびょうきなんだ！
ママのびょうきをなおしてあげたい！でも、どうやって…？

「なるほど、君は母親の病気を治したいんだね。僕でよければ、力になってあげられる」

＝＝＝

私は、アリシアの代替品。結局…必要とされていないんだ。
生まれてきちゃ、いけなかったのかな…

母さんのもとに行っているアルフ、それにあの白い子…。
…あの子、何て名前だったっけ。
ちゃんと教えてくれたのに…。

何度もぶつかって、私…酷いことしたのに。
話しかけてくれて…、私の名前を、呼んでくれた。
何度も、何度も…。

…？…あの光は？
…そうか、バルディッシュが…。

バルディッシュ、私の…私達の全ては、まだ始まってもいない…？

「Ｇｅｔ　ｓｅｔ」

…、そうだよね。
バルディッシュも…ずっと私のそばに居てくれたんだもんね…。
それにアルフだって、いつも支えてくれていた。
そして、友達になりたいと言ってくれたあの子…。

私には、大切な仲間がいるんだ…！

お前も、このまま終わるのなんて嫌だよね。

「Ｙｅｓ，　ｓｉｒ！」

…上手くできるかわからないけど、一緒に頑張ろう。

いくよ…、リカバリー！

「Ｒｅｃｏｖｅｒｙ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ！」

…私達の全ては、まだ始まってもいない。

だから、本当の自分を始めるために…今までの自分を、終わらせよう！

母さん…それから、アリシア…。

今、参ります！

「シューーーーーート！！」

「うおおおおおおっ！！…くっそ、後から後から…！」

「…バインドが破られたっ！？なのはーっ、後ろーっ！！」

なのは…。
今、助けるからねっ！
「Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｒａｇｅ！」
「サンダァァァァァーーー…、レイィィィィィィーーーージ！！！！！」

殲滅、完了。
間に合ってよかった…。
「フェイト…ちゃん？」
見つめあう私達。
やっぱり…私はこの子、なのはと一緒だと安心できるみたい。
どちらからともなく近づく…
しかし突然壁を突き破って現れる巨大な魔導ゴーレム！
「大型だ、防御が固い。だけど…」
もう迷わなかった。
「…二人でなら」

一瞬驚いたような顔をするなのは。
そしてすぐ、瞳に涙を浮かべて…何度も何度も頷く。
ああ…、なのははこの瞬間が来るのを本当に待っていたんだね…。

ゴーレムが無数の砲塔で激しい射撃を開始した！
しかし私もなのはも、こんな弾幕程度に当たる筈がない。
高速で避け続け、撹乱する！

「Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ」

「Ａｒｃ　Ｓａｂｏｒ」

こちらの攻撃は確実に命中、敵の武装を次々に破壊していく！

…体が軽い。こんな幸せな気持ちで戦うなんて初めて。

程なくして、ゴーレムの砲塔は残り少なくなった。
敵は限界を感知したのか、残った砲塔で大威力砲撃を行う準備を始める…！

「バルディッシュ！」

「Ｇｅｔ　ｓｅｔ！」

「レイジングハート！」

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ！」

敵が最大砲撃なら…

こっちも、最大威力の同時砲撃で決める！

「サンダァァァーーーー、スマッシャァァァァーーーーー！！」

「ディバイィィィーーーーン、バスタァァァーーーーー！！」

…あとひと押し！

「「せーーーーーーーーーーーーーーーーのっ！！」」

…もう、何も恐くない！

＝＝＝

再び見つめあうわたし達…でも、他にもフェイトちゃんの心配をしてくれる人がいた。

「フェイトぉぉぉぉーーーーーーっ！！」

「アルフ…心配かけてごめんね。
でも、もう大丈夫。これから本当の自分を始めるから…」

抱き合うフェイトちゃんとアルフさん。
よかった…、ほんとうによかったよぉ…！

そしてしばらく進むと、エレベータみたいな場所に出た。

「あそこから駆動炉に行ける。私は…母さんに会ってくる！」

ここからは別行動だね…。
その前に！

「フェイトちゃん…その、上手く言えないけど…」

わたしはフェイトちゃんの手を取る。
やっぱり緊張するな…。でも、ここで頑張って言わないと！

「…がんばって」

「…ありがとう」

そして、わたしとユーノくんは駆動炉に向かう。
フェイトちゃんとアルフさんは、クロノくんを追って最下層…プレシアさんの所に向かった。
わたしは…やるべきことをやらないと！
…駆動炉に着くと、無数のゴーレムが待ち構えている。
「防御は僕がやる。なのはは封印に集中して！」
…いつも通りだね。
今までだって、こうしてきたんだもん。絶対に成功するよね…。

だけど、何となく嫌な予感がする。
何だろう…ここまできて、邪魔が入るとも思えないんだけど…。

「Ｃａｕｔｉｏｎ，ｍａｓｔｅｒ！ Ａｎ ｅｎｅｍｙ ｉｓ ａｐｐｒｏａｃｈｉｎｇ ｆｒｏｍ ｂａｃｋ！」
後ろから敵が！？
レイジングハートの警告のすぐ後、後ろに感じた激しい殺気！
振り向きざまに距離をとる…次の瞬間には、私がいた場所を空色の光が切り裂いていた…！

「ママのじゃまをしないでーーーーっ！！」

幼い声。
そこにいたのは、空色に輝く大剣を握りしめた、フェイトちゃんと
瓜二つの…

「アリ…シア…、ちゃん？」

第九章「最後に残った道しるべなの」（前書き）

第九章。

とうとう物語はクライマックスへ。
なのはたちは絶望を打ち砕けるのか！？

この小説はこのシーンのためだけにある、と言っても過言ではない。
というか長すぎサーセン

第九章「最後に残った道しるべなの」

なのはも頑張っているんだ…。私も急がないと！

「フェイト…新しい魔法を使えるようになったみたいだね」

「うん…」

そう。いつのまにか、私は新しい力を手に入れていた。
ミッドチルダ式魔法とは全く違う…なのはが最初に使っていた謎の魔法。
あの白い動物に願ったときに得た、黄金色の宝石。今は懐に入れてるけど…

「その魔法はかなり危険なんだ。使いすぎると…いつか見た謎の怪物になっちまうらしい」

え…？
突然予想外のことを言われて動揺する私。
でも…使わなければ問題ないって事だよね？

「例えあいつと戦うことになっても、フェイトは今まで通りミッド式魔法を使えばいい。
決して新しい魔法を使おうなんて考えちゃだめだよ！」

「…分かった。この宝石の魔法は使わないよ」

「ふん…口ほどにもない」

「が…はっ…！」

最下層に着いた私が見た光景は…ボロボロの黒いあの子…クロノ？
それから…元気そうな母さん…。

「母さん…」

「何をしに来たの…消えなさい、もう貴女に用はないわ」

そう言うや否や、母さんの魔力弾が私に向かってきた！
何とか避けたけど…母さん、魔法を使っても全然苦しくなさそう…。
そう思う私に、管理局の緑髪の女性から連絡が入った。

「フェイトさん、気をつけて！プレシアの病気が治っているみたいよ！」

母さんの病気が、治っている…？

「ええ…私はもう病気じゃない。再び奇跡が起きたのよ」

「よかった…」

母さんにはもう見捨てられたというのに、つい口を突いて出た言葉は安心の言葉。

…当然。

「さて、貴女の所にもゴーレムを向かわせたわ。すぐに始末してくれるでしょう」

「プレシア…アリシアが蘇った今、一体何が目的なのですか！？」

「決まってるでしょう…、私とアリシア、二人きりの楽園に旅立つのよ。

次元の狭間…管理局にも何にも邪魔されない、私達だけの聖域に…！

他の何にも侵されない世界、それこそが私の…最後に残った、道しるべなのよ…っ！」

…母さんにはもう、アリシアしか見えていない。

最初からそうだった。最初から私なんて見ていなかった。

でも、母さんのアリシアへの愛は間違いなく本物だった。

それは…アリシアの母さんへの愛も、また本物だったからだよね。

「母さん…あなたに、言いたいことがあります」

「…？」

「私は…、ただの失敗作で、偽物なのかもしれません。

アリシアになれなくて、期待にこたえられなくて…。

いなくなれって言うなら遠くに行きます。だけど、生み出してもらってから今までずっと…

今もきっと、母さんに笑ってほしい…幸せになってほしいって気持ちだけは、本物です」

だから…私の母さんへの愛も、本物。
今でも私は、あなたを愛しています…。

「私の…フェイト・テスタロッサの、本当の気持ちです」

「フッ、下らないわ。
言ったでしょう…私は貴女が大嫌いだって」

…やっぱり悲しい。
管理局の船に来た時から分かっていたはずなのに…やっぱり、悲しいよ。

「でもまあ、結局ここに来てしまったのだから…
せめて私の手で終わらせてくれようかしら！？」

母さんが杖を構える！戦う気なんだ…。

「フェイト…こうなったらやるしかない。あたしも戦うよ」

アルフ…。

「…分かりました。私も、この手で決着をつけます！」

＝＝＝

そしたら、わすれちゃってるかもしれない…わたしのわがまま、きいてもらうんだ。

…いもうとが、ほしい。

「ここには魔女化を抑えるようなものはない。それに彼女にとって、フェイトは…妹そのものだ。
…この事件の発端となった君の宿す因果は膨大だ。きっと素晴らしいエネルギーが手に入る。
頑張れ、アリシア。君の魂を…宇宙にささげてくれ」

＝＝＝

「落ち着け！…プレシアは周りにすごい迷惑をかけているんだ！」
「これがおわったら、わたしたちはだれにもめいわくをかけないですむってママいってたもん！」
「だからって…ひゃっ！今すぐに止めないと大変なことになるの！」
「そんなことわかってるよっ！！」
…！？
「ママがわるいことをしていることくらい、なんとなくわかってる！でも…ママがつかまるのなんていやなのっ！」
「で、でも…！」
「つかまったらママはまたひとりぼっちなんだよ？
それに、またママといっしょにいられなくなるなんて…ぜったいやだ！
でもママはいけないことをしてる…。わたし、どうしていいかわからないよ！」
泣きながら叫ぶアリシアちゃん。
本当に、プレシアさんの事が大好きだったんだよね。
それにアリシアちゃん自身もずっと寂しい思いをしてきた…。
「わたしが…ママを…まもるんだ…！」

アリシアちゃんの大剣がひときわ眩しく輝く。魔法を使おうとしているんだ…。
…この魔法、ミッドチルダ式と違う！何だか懐かしいような…。
まさか…。

「Ｍａｓｔｅｒ！　Ｔｈａｔ　ｉｓ　”Ｐｏｌｌｕｔｅ－Ｔｙｐｅ”！」

「間違いない…あの子、アリシアは『魔法少女』だ！」

そんな…！まさか、キュゥべえがまた…！？

「アリシアちゃん！今すぐ魔法を止めてーっ！」

「やだぁぁぁーーーーーー！！！！」

光り輝く剣を大きく振るアリシアちゃん。するとそこから無数の光の矢が放たれる！
辺り一面にまき散らされる矢！避けられないからシールドで防ぐ…しまった、近づかれた！アリシアちゃんが目の前で大きく振りかぶる…！
何かが砕ける音。シールドを抜かれたっ！？

「なのはぁぁぁーーーーーーーーーーっ！？」

…どうにか受け流した…。
やっぱり魔法少女の魔法は非殺傷設定とかないんだよね…。
攻撃が重い…！

こうなったら、ちょっと強引だけど…力づくで黙ってもらうしかない！

「（なのは、できる限り引きつけてくれないか？僕が…）」

「（わかった、いつも通りだね！）」

「Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ」

こっちから光の弾で攻撃する！
でもアリシアちゃん…びっくりするほど少ない動きで避け続けてる。
と思ったら、剣でこっちの攻撃を跳ね返してきたり！
…隙がなさすぎる！

「はぁぁぁぁーーーーーっ！」

そこでユーノくんのチェーンバインドが迫る！

「そんなものあたらないよっ…、はっ！どこ…？」

この隙を逃さない！動力炉の影から全速力で突進をかける！
剣で受け止めるアリシアちゃん。すぐに押し返そうとする…、

ここでユーノくんのチェーンバインドが今度こそアリシアちゃんを捉えた！…今だっ！

「ディバイィィィーーーーン、バスタァァァーーーー！！」

「うあああああーーーーーーーーっ！！」

うわ、壁を突き破っちゃった！
下の方までどんどん落ちていくアリシアちゃん…早く追いかけないと！

＝＝＝

「…何っ！？」

突然叫ぶ母さん。

よく見ると、母さんにバインドがかかっている！

しかも…あれはジュエルシードの龍のときと同じ、対象の魔力を奪うバインドだ！

「水を差して悪いが、僕たちの目的は勝負じゃなくて逮捕だ！」

「小賢しい真似を…っ！」

でも…そのバインドもすぐに割られる。そして母さんの反撃。

バインドの効果で威力が弱まったとはいえ、母さんの一撃を受けて立っていられるはずがない。

「がぁぁっ…」

「…もう飽きたわ。まとめて始末してあげる。

それからね…あの緑髪の女も、度々邪魔してきた魔導師も、排除してやるわ」

（ズガァァァァーーーーン……）

突然天井が爆ぜた！何かが猛スピードでこの部屋の地面に落ちてきた…

そこから立ち上がった、

「「…アリシア！？」」

私と母さんの声が重なった。
駆けだしたのは母さん。私は…立ち上がるのが精いっぱいだった。

「アリシアっ！一体何が…！？」

「う…っ、ママ、ごめんね…。どうりょくろ、まもれなかった…
どうしよう…、もうだめなのかな…？」

動力炉を守れなかったって…
アリシアは、なのは達と戦っていたということ！？

「アリシアちゃんっ！？」

上からなのは達が下りてくる！

「貴女たちが…。私の、私の可愛いアリシアを…よくもぉぉぉぉぉ
！！！！！」

母さんが…逆上した。
恐ろしい威力の魔法弾を連射している！

「いつもいつも邪魔をして、フェイトを迷わせ、
挙句の果てにアリシアに手を出すなんて…っ！絶対に殺してやる
わぁぁぁ！！！」

…怒りに我を忘れている母さん。攻撃がかなり直線的になっている。でも、なのは達に攻める隙を与えている訳ではなく、近づくことさえ許していない！

…アリシアが、私に気づいて…？

＝＝＝

だした』…。
それじゃあ、フェイトは…。
そしてフェイトがしんにゅうしゃ…。わたしがやっつけようとしていた…！

わたしは…。いったい…？
「アリシア…？」
…やめて。こないで。こないで、こないで…

「アリ…シア…！？」

「こないで、こないで、こないでこないでこないでこないでこないでこないでこないで」

＝＝＝

「落ち着いてプレシアさん！アリシアちゃんは…！」
「黙れッ！！このガキがぁぁぁ！！！」
なのは達は母さんと対峙するのに必死で、アリシアの異変に気付いてない。
母さんさえも、怒りでアリシアが見えなくなってる…！
「母さんっ！…アリシアが…！」
…だめだ、聞こえてない。
早く何とかしないといけないのに…！
「こないでこないでこないで、こない…で…」
「アリシアーーーーーーッ！！！」
私にはかけよることさえもできない…

「……ママ」
「…アリシア？」
「もういやだ。わたし、もういやだ。
もうだれにもあいたくない。もうナニもみたくナイ。
もウなニモきキタクなイ。ママ…」
「あ…ああ…！」

何もできない…！
恐怖で動けない、動けたとしても私にできることなんてない…！
こんな、こんなの…！

「アリシア…ちゃん…？」

「どうしたんだっ！？…まさか！」

「イッショニ、イコウ」

思い出した。
この世界…この雰囲気…。

一瞬だけ、私の眼に母さんの顔が映った。

例えすぐに消え去ることになっても、
アリシアと一緒に居られる…それだけで母さんは幸せだったんだ。
その時の狂ったような笑いを、私は一生忘れない…と思う。

でも私は、この時…もっと忘れられない笑いを見てしまったんだ。
それは、アリシアの…

悲しみと絶望に満ちた笑いだった。

―Ａｉｓｉａ―

光の魔女。その性質は拒絶。
強固なバリアーで自らを覆い、この世のあらゆる現実から逃避する。
彼女には何も届かない。近づくものは全て消し去られる。
この魔女を倒したくばバリアーを弱める方法を探すしかない。
もし彼女が心を開いたのなら、バリアーはその力を殆ど失うだろう。

＝＝＝

「う…奴め、いつの間にアリシアと契約を…！」
クロノくんが何とか立ち上がる。
「何とか…何とかならないんですかっ！？」
「無理だ…。こうなってしまった以上、アリシアは助からない」
「ひどいよ…！こんなの、あんまりだよぉ…！」

…あそこにある光の塊は、確かにアリシアちゃん。
今なら分かる。プレシアさんの病気が治ったのも、アリシアちゃんがキュゥべえと契約したから。
アリシアちゃんは、プレシアさんが大好きだった。
だから最後まで信じようとして…でも迷いながら、わたし達と戦っていた。
私の砲撃でアリシアちゃんを落としたとき、もうソウルジェムはかなり濁っていたのかもしれない。
そして、フェイトちゃんを見て…何を思ったのかはわたしには分からない。
でもきっと…アリシアちゃんの中で何かが壊れて…。
思えば、プレシアさんが騒ぎを起こしたそもそもの理由はアリシアちゃん。
つまりアリシアちゃんの因果はかなり大きいということ。キュゥべえは、そこに目をつけた。

キュゥべえ…。
フェイトちゃんの時といい…、あなたは、どれだけ人の希望を踏みにじるの！？

「…終わらせよう。アリシアは、あんなにも苦しんでいる。早く楽にしてあげるんだ」
クロノくん…、良くも悪くも冷静なクロノくんが、眼に涙を浮かべていた。

「なのは…。アリシアは、本当は止めてほしいはずだよ」
ユーノくんも…。

「…Ｉ　ｂｅｌｉｅｖｅ　ｙｏｕ．　Ｌｅｔ'ｓ　ｒｅｌｉｅｖｅ　ｈｅｒ」
レイジングハート…、そうだよね。わたしにできること、やらなきゃね。

「…絶対に助ける。アリシアは、母さんの宝。そして…私の家族！！」
フェイトちゃんの…家族…

「うん…、やろう！」

これで…終わりにするんだ！

＝＝＝

ならば、私は私の仕事をしなきゃ。

「私は動力炉に向かい、暴走を抑えます！
　エイミィはなのはさん達の脱出経路を探し、またアースラの乗組員より封印の為の人員の確保を！」

みんな、無事でいて…！

＝＝＝

緑髪の…ユーノが咄嗟にシールドで防ぐ。だけどレーザーの猛攻は続く…、破られた！

「うわぁーーーっ！」

「ユーノくん！？だいじょうぶっ！？」

「…大丈夫だ。今度は…三人同時にやってみて」

「わかった！」

今度は三人の一斉砲撃。しかし…結果は同じ。アリシアのバリアーは破れない。

反撃も激しさを増し、なのはも防御に精いっぱいという状況。

なら…クロスレンジでいく！

「…フェイトちゃん！？」

バルディッシュとともにアリシアに接近！

「Ｓｉｚｅ　Ｆｏｒｍ！」

光の刃で…斬りかかる！

…止められた、だけど押し切る！

「うおおおおおおおおっ！！」

懐の宝石が淡く光った気がした。このままいけるか…？

「……コナイデ」

…！？

一瞬動揺する私。次の瞬間には、衝撃波を受けて吹き飛んでいた。

「大丈夫…！？」

「…アリシアの声が聞こえた」

そう、確かに…小さいけど、アリシアの声がした。

「ほ、本当か！？」

「じゃ、じゃあ…！呼びかければっ！」

なのはがアリシアにかけ寄る。

…本当は、なのはだって戦いたくなんてないはずなんだ。

だからこうして、何とか落ち着いてもらおうとしている。

「アリシアちゃん…やめて、お願い…思い出して！

こんなこと…アリシアちゃんだって嫌だったはずだよっ！」

「……！！」

でも…アリシアに、なのはの声は届かない。

心を閉ざした彼女に声を届かせることは、並大抵のことではないんだ。

「うあーーーーーーーーーーっ！！」

「なのはーっ！？」

倒れたなのはに追い討ちをかけるかのように、放たれる…
視界を埋め尽くす光線！

「くっ…何か、方法はないのか…！？」

…彼女に声を届かせるには、全く別の方法が必要なんだ。
でも私達はミッド式魔法以外に何ができる…？

何も…。

――…君は”想いを通す力”を得た。その力は全てを貫く……――

…！

「…ごめんね。アルフには危険って言われたけど、この力…使ってみる」

「フェイトちゃん…、まさか…ソウルジェムを！？」

そう。なのはに負けて、アリシアが蘇った時に得た…得体の知れない力。
アリシアだってあの力が原因で化け物になったみたいだけど…
私が得た”想いを通す力”をもってすれば、貫けないものなんか無いような気がする。
もしかしたら…っ！

「やめろっ！それを使ったら、君までっ…」

「…そうなったら、あとはお願い」

大丈夫。私は防御は薄い。
例えあのように化け物になっても、なのはたちなら私を倒せる…！

「アリシア、今行くよっ！！」

アリシアに突進！
再びバルディッシュの刃がアリシアのバリアーを噛んだ。

今度は、あの新しい力で…！

「…アリシア、ごめんね。私はあなたのコピー。偽物なのかもしれない。
だけど…だからこそ、母さんに幸せになってもらいたい気持ちは、あなたといっしょだよ」

力を解放する。

手に持った宝石が脈動する。

「それと…、母さんのそばっていう居場所を奪って、ごめんね」

「……！？」

手ごたえが変わった！？これなら…あともう一息！

「でも、私もあなたも母さんの娘。だから…あなたと私は、”家族”なんだよ」

「……！！！」

…バリアが綻んだ！

私も、もう限界なのかもしれない。

だけど、この運命に決着をつけるために…アリシアを解放してみせるっ！！

「だから…今、助けてあげるよっ！！！」

貫いた。

一瞬見えたのは、こちらを見据えて涙を流す…純白の少女のシルエットだった。

「フェイトちゃああああああーーーーーーーーーーーーーーーーーーーん
！！！！！」

最終章「わたしの、最高の友達なの」（前書き）

最終章。

まどかを知っている人なら想像付いたかもな結末。

とりあえず、世界線は正史に収束してます。（なんのこっちゃ）

最終章「わたしの、最高の友達なの」

世界が、元に戻った。

「フェイト…まさか、やったのか！？」

目の前には…プレシアさんと、抱かれたアリシアちゃん。
上から落ちてくるのは…フェイトちゃん。

「フェイトちゃぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーん！！！！！」

わたしは、地面に落ちるぎりぎりで抱きとめる。
フェイトちゃんの左手に…ほとんど濁りきった宝石があった。

「フェイトちゃん…しっかりして！」

だめ、目を覚まさない！
どうしよう、このままじゃっ…フェイトちゃんまで…！

ふと気がつくと、上からもう一つ何かが降ってきた。
まっ黒な…ソウルジェム。フェイトちゃんの左手に落ちてくる。
これは…アリシアちゃんの？

アリシアちゃんの黒いソウルジェム…グリーフシードだっけ？それがフェイトちゃんのに触れる。

その時…思いもよらなかったことが起きたの。

「…ソウルジェムが、きれいになってく…！？」

＝＝＝

この声は…アリシア？

「（もうだいじょうぶだよ。フェイトはまじょになんてならないよ）」

…そういえば今私、化け物になろうとして…いない。

アリシアが、助けてくれたの…？

「（わたしね、むかし…ママにおねだりしたの。おたんじょうびプレゼントにね。

…いもうとが、ほしいって）」

妹…？

「（わたしはしんじゃって、フェイトはそのかわりかもしれない。

でも、わたしにとってフェイトは…ずっとほしかった、いもうと。

ママはね、わたしのおねがいをかなえてくれたんだ）」

母さん…。

私が、アリシアの妹として普通に生まれてきていたら…どうなっていたんだろう…？

「（でもママはきづかなかった。

わたしも…ママといっしょに、どこかとおくにいくつもりだったの。

だけど、そこにフェイトがきて…わかったんだ。

このままママといっしょにいくと、いもうととはなればなれになっちゃうってね。

…わたし、けっこうひっしにたたかってたんだよ？ママがただ

しいとおもってたから。
　でも、これはまちがいだったってわかって…パニックになっちゃって…。
　ほんとうに、ごめんね）」

…うん、やっぱりアリシア…母さんが大好きなんだよね。
母さんを信じて…その意思が否定されたらパニックになっても無理はないよね。

「（でも、こうしてフェイトにたすけてもらっちゃった。
　だから…こんどはわたしがフェイトをたすけるばんだよ。
　せめていっかいくらいは…おねえちゃんらしいところをみせてあげなくちゃ）」

アリシア…。
ごめん、ごめんね…頼りない妹で。

「（フェイト、バイバイ。たいせつなともだちと…、ずっと…なかよく…して…ね…）」

アリシアの声が細くなっていく！まさかもう…消えるの…？

アリシア…、アリシアーーーーーーーーー！！！

＝＝＝

「…そういえば、説明してなかったね。
魔女となった子のソウルジェムは『グリーフシード』と呼ばれることは言ったはずだ。
これには…ソウルジェムに溜まった呪いを吸収する力があるんだ。
でも…呪いをため込みすぎると、グリーフシードは再び魔女となって暴れてしまう。
だから管理局としてはあまり使いたくはなかったんだが…」

クロノくんが、フェイトちゃんが助かったわけを説明してくれた。
…落ち着いているような口ぶりだったけど、ちょっとだけ興奮しているようにも思うの。

「フェイト…フェイトは、助かったんだろう！？」

目を覚ましていたアルフさんは、分かりやすく興奮している。
クロノくんもこんな風に素直になったらいいのに…。
ところでユーノくんは…あ、黙ったまま涙を流していた。

「よかった…本当によかったよぉ…！」

これで、もう終わりなんだよね…！

「クロノ、なのはさん、聞こえるっ！？」

…リンディさんからの通信だ！

「動力炉の暴走が抑えられない！…今すぐに脱出して！！経路はエイミィが指示するわ」

動力炉が暴走！？

意味を飲み込んだ瞬間、上からすごい音が！

上を見ると…さっきの動力炉がすごい大きくなってゆっくり落ちてきてる！

「まずい…！これでは間に合わない！みんな、脱出を！」

「…わたし、封印してみる」

「！？」

脱出したら動力炉の暴走が続いて…次元震が更に大きくなる。

そうなると、プレシアさんを止めた意味がなくなっちゃう。

それに…封印はわたしの仕事だったはずだし！

「だいじょうぶ。もう魔力はほとんど残ってないけど、あれなら撃てる。…レイジングハート、いくよ」

「…Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，　ｄｏｎ'ｔ　ｋｉｌｌ　ｙｏｕｒｓｅｌｆ．
Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ」

「「！？！？！？」」

みんなが驚く。きっと私の心配してくれてるんだ…。

「無茶だっ！集束砲はさっき撃ったばかりじゃないか！それをまた撃つなんて…体への負担がっ！
なのはは自分を壊す気か！？」

…それを言うなら、フェイトちゃんだって魔女になる覚悟でアリシアちゃんを助けたんだからね。
次はわたしの仕事だよ！

「はぁぁぁぁぁ……！」

…くっ、だめ…、体が言う事を聞かない！魔力がなかなか集まってこない…！
やっぱり無理があったのかな…。

「無茶だよ…！あんなの、一日に二回も撃てるわけがないだろうっ！」

「…」

集束砲撃は、周りにある魔力を集めて放つ大技。
わたしはまだ未熟だから、自分が使った魔力しか集められないけど…
今は、それさえもなかなか集まらない。このままじゃ…、みんなを守りきれないっ！
何か…何でもいいから、集まって…！

…？
なんだか力がみなぎってきた。これは…一体…？

「…なのは？一体何が…！？」

「別の魔力がなのはさんに集まっています。…ポルート式です！」

「「！？」」

…そうだよね。わたしも元々魔法少女だった。だからポルート式も使ったことがあるんだっ！
わたしに力をくれた、魔法少女の魔力。それは、フェイトちゃんとアリシアちゃんの魔力。
それが集まってくる…二人が力をくれているんだ！

お願い、わたしに…力を貸してっ！！

「スターライトォォォォォーーーーーーーー…、ブレイカァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

＝＝＝

の保護と確保…
やらなきゃならないことが多すぎるわ…。
いけないいけない、つい弱音を吐きそうになってしまったわ。
今やるべきことに集中しないと。
さしあたっては、なのはさんの治療、フェイトさんのジェムの処理
…といったところかしら？

＝＝＝

情状酌量の余地はある。少なくとも、執行猶予は取れるよう働きかけてみるよ」

でも、こうしてクロノくん達が一生懸命努力してくれるって。その間はリンディさんが保護者代わりって言ってた。
クロノくん…本当は、優しいんだね。
いつもちょっと冷たく見えたのは、ただ仕事だったからなんだよね…。
根っから冷たいキュゥべえとはやっぱり違うや。

あと、プレシアさんが事件を起こした理由なんだけど…
元々アリシアちゃんを蘇らせるために、ジュエルシードを使って『アルハザード』って所に行こうとしていたみたいなの。
…過去を変えることと死者を蘇らせることはどんな魔法でもできっこない。
魔法を学ぶ人ならだれでも知っているっていう、このルール…。
でも、次元の狭間に眠ると言われるアルハザード…そこにはどんな望みでも叶うほど発達した魔法文明があったとか。
だからプレシアさんは、アルハザードの秘術でアリシアちゃんを復活させようとしていたの。
…でも、フェイトちゃんのキュゥべえとの契約でアリシアちゃんは生き返った。
だけど自分は管理局に追われる身となっていた。だから二人で…誰にも邪魔されない所に行こうとしたんだって。
もしもアリシアちゃんが生き返ってなかったら、一体どうなっていたんだろう…。

アースラは近々本局に帰ることになるみたいなんだけど、
それまでの間は魔法少女救出に力を注いでくれるみたい。
しかも本局に帰ったら、直ちに地球にも魔法少女対策支部をつくっ

てくれるって。
これで…地球からも、アリシアちゃんみたいな悲しい人が減るんだよね…。
それにしてもキュゥべえは一体どこに行ったんだろう？また魔法少女を作ってるのかな…

そして、わたしは海鳴に帰ったの。
数日家を空けてたので、お父さんやお母さん、アリサちゃんやすずかちゃんも心配していました。
でも、無事に帰ってきたという事で…お祝いしてくれちゃった。可愛いペットも帰ってきてくれたってね。
…可愛いペットっていうのは、実はフェレットになったユーノくんのことです。
ユーノくんは、故郷に向かうルートが安定しなくてしばらく帰れないの。
でも職員じゃないからアースラに居座るわけにもいかないし、キュゥべえや魔法少女とも関係がない。
そこでわたしの家に来てもらう事になりました…ということ。
てなわけで、わたしとユーノくんの仕事はひとまずおしまい。
でも…もし魔法少女を見つけたら、保護に協力させていただけることにもなったの。
もしかしたら魔女と戦う事にもなるかもしれないし…レイジングハートとの特訓も、欠かさないようにしなきゃ！

こうして、とりあえず戻ってくるわたしの日常。
今まで通りだけど、いろんなことがあったから…今までとは少しだけ違う日常。
夢中だったときのことは、過ぎ去ってしまえば何だか一瞬のことのようで…
だけど、心の中には確かに残ってる。

出会ったこと、必死だったこと、色んなこと…。

だけど、まだ終わってないのは…
気になるのは、きれいで優しい目をしたあの子のこと…

数日後。

朝早くにケータイにかかってきた電話で、わたしは目を覚ましたの。
こんな時間に何だろう…

「…え？」

（着信中：時空管理局）

「えーーーーーー！？」

管理局からの電話だ！

「あ…はい、もしもし！」

「あ、なのはさん？ごめんなさいね…朝早くに」

この声、リンディさんだ！

「フェイトさんの裁判の日程、来週から本局行きって決まったの。でね、その前に少しだけなんだけど…」

…リンディさんの話に、すごく嬉しいお知らせがあったの！

「はい…は、はいっ！すぐ行きます！」

「なのは…どうしたの？」

あ、ユーノくん起こしちゃった。

でもせっかくだし、ユーノくんも一緒に連れて行こうっと！

「フェイトちゃんと、少しだけど会えるんだって！

…わたしに会いたいって、言ってくれてるんだって…！」

待ち合わせ場所は、海鳴海浜公園。

フェイトちゃん、それにクロノくんとアルフさんが待っててくれてたの。

そこにわたしは、一番のお気に入り…白い勝負リボンをつけて来ま

した！

「フェイトちゃーーーーーーん！！」

久しぶりに会えたから、嬉しくなっちゃうよ！

「僕達は向こうにいるから」

クロノくんとアルフさん、いつの間にかそっちに行っていたユーノくんが、気を利かせてくれた。

…これで、やっと二人っきりでお話ができるんだ。

「ありがとう！」

「…ありがとう」

「……」

「……」

見つめあうわたしたち。

どっちからともなく笑みがこぼれるけど、なかなか言葉が出てこない…。

「あっはは…いっぱい話したいことあったのに、変だね。フェイトちゃんの顔を見たら、忘れちゃった…」

やっと口を開いたわたしでした…。

「私は…そうだね。私もうまく言葉にできない。
だけど、嬉しかった。まっすぐに向き合ってくれて」

「…うん！友達になれたらいいなって、思ったの！
でも…今日は、もうこれから出かけちゃうんだよね」

「そうだね…少し長い旅になる」

そう。これからフェイトちゃんは、数カ月かかる裁判に出なきゃいけないの。
でも…これが永遠の別れなんかじゃない。

「また…会えるんだよね？」

「…うん。少し悲しいけど、やっとホントの自分を始められるから」

…フェイトちゃんが、お母さんの事を忘れられるはずなんてない。
だけど、今のフェイトちゃんは…今のフェイトちゃんだから。

「来てもらったのは、返事をするため」

「う？」

「君が言ってくれた言葉…”友達になりたい”って」

…そうだ。あの時…協力して、融合暴走したジュエルシードを止めた時、
確かにわたしはフェイトちゃんに、こう言った。
「私にできるなら…私でいいなら…って！
…だけど私、どうしていいか分からない。だから教えてほしいんだ。どうしたら、友達になれるのか…」
フェイトちゃんは…アルフさん別として、今まで友達がいるはずなかった。
ずっとプレシアさんに育てられてきたから…、友達の作り方なんて分からないんだ。
でも…本当は、とても簡単なこと。
アリサちゃんとすずかちゃんを、友達として意識するようになったのは…あのちょっとしたきっかけがあったから。
だから、フェイトちゃんもやってみればいいの。
「簡単だよ。友達になるの…すごく簡単」
そう、本当に簡単なこと。教えてあげれば、絶対にできる。
「…なまえをよんで」
「…？」
「初めはそれだけでいいの。きみ…とか、あなた…とか、そういうのじゃなくて、

ちゃんと相手の目を見てはっきり相手の名前を呼ぶの。
…わたし、高町なのは。なのはだよ」

アリサちゃんたちだって、名前を呼んだとたんに急に友達っぽく感じたことを覚えてる。
名前を呼ぶこと…いちばん簡単な、友達を作る魔法なの！

「…なのは」

呼んでくれた。
初めてフェイトちゃんが、わたしの名前を呼んでくれた！

「うん…そう！」

「…なのは…なのはっ…！！」

「うん…うん…！！」

うれしくて…うれしくて…わたしは、フェイトちゃんの手を握っていた。

「…ありがとう、なのは」

「うんっ…！！！」

なんでだろう…、悲しくないのに、涙が出ちゃう。
うれしくて…本当にうれしくて、泣きたくなるほど…！！

「…君の手はあたたかいね、なのは」

涙が止まらない。
うれしくて…もう言葉も出ない。何もできない…

「少し分かったことがある。友達が泣いてると、同じように自分も悲しいんだ」

…いつのまにか、フェイトちゃんがわたしの涙をぬぐってくれてた。

「…フェイトちゃんっ…！！！」

もう我慢できなくなって、わたしは…フェイトちゃんに抱きついていた！

「ありがとう、なのは…今は離れてしまうけど、きっとまた会える。そしたらまた…君の名前を呼んでもいい？
…逢いたくなったら、きっと名前を呼ぶ。だからなのはも、私を呼んで。
なのはに困ったことがあったら、今度はきっと…私がなのはを助けるから」

「うん…っ、うん…っ！！」

わたしは、ずっと泣いていた。
フェイトちゃんの腕の中で、泣いていた…。

「時間だ。そろそろいいか？」

クロノくんが来た。
…あっという間の、タイムリミット。
でもその前に、最後にひとつだけ、やっておきたいことがある！

「フェイトちゃんっ…！」

わたしは、頭に着けていた白いリボンを取った。
わたしの勝負リボン。でも…もったいないなんて、これっぽっちも感じないの。

「思い出にできるもの、こんなものしか無いんだけど…」

「じゃあ、私も…」

そう言うと、フェイトちゃんも自分の頭の…黒いリボンを取る。
そして…交換。

「ありがとう、なのは…」

「うん、フェイトちゃん…」

「ありがとう。アルフさんも元気でね」

「ああ、色々ありがとね。なのは、ユーノ」

アルフさん…考えてみれば、わたしの知らないフェイトちゃんをよく知っているんだ。
ちょっとうらやましい…だけどわたしは、これから知っていけばいい！

「それじゃあ、僕も行くよ」

「うん。クロノくんもまたね」

そういえばクロノくんはリンディさんの子供。
ということは、フェイトちゃんと兄妹かぁ…なんだか複雑。

そして、三人のもとにゲートが現れ、転送されていく…。
ばいばい、またね。クロノくん、アルフさん、
…フェイトちゃん。

「…きっとまた」

「…うん、きっとまた…！」

フェイトちゃんが手を振ってくれる。わたしも振り返す…。

三人の転送が終わった。
残ったのは、わたしとユーノくんだけ。

思えば、わたしがフェイトちゃんに出会ったそもそものきっかけは…ジュエルシードと、魔法少女。
正直、わたしはともかく…フェイトちゃんやアリシアちゃんにひどいことをしたキュゥべえは許せない。
でも…魔法少女になったおかげで、フェイトちゃん…わたしの、最高の友達に逢えたんだ。
だからわたしは、わたしたちを引き合わせてくれた運命に感謝します。

「…なのは」

「…うん、平気。きっとまた、すぐに会えるもんね」

PUELLA MAGI NANOHA MAGICA

THE END

エピローグ（おまけ）「コネクト」（前書き）

これはひどい。全てにおいてひどい。
悪ふざけもひどければオチもひどい。

特にまどかを知らない人にとってはわけのわからないもの。
というかどうしようもないもの。全ての譜面が…ってこれは違うか。

読まないことをお勧めします。

エピローグ（おまけ）「コネクト」

――…これはソウルジェム。魔法少女の証であり、君の魂の結晶だ…――

――…絶望や呪いの感情から生まれる化け物『魔獣』。人間を呪い、心に語りかけて自殺に追い込む…――

――…あなたには今回のことからは手を引いて、魔獣退治に専念してもらうわ…――

――…たくさんの魔法少女が自分の願いに裏切られると聞きます。魔法少女になる覚悟って、こういうことなんですね…――

――…ジャンヌの精神は強かった。最後まで絶望しなかったからね。彼女には気の毒だが、こんなに強い人ばかりなら苦労はない…――

――…わたしがとめる！これいじょうみんなをこまらせるようなことなんてしたくないっ！…――

――――……（あなたたちの祈りを、絶望で終わらせたりしない…！）
……――――

＝＝＝

ことになるが…装置にはエラーはあっても矛盾は一切無かった。
矛盾さえあればそこから起点を推定することはできるけど、これでは手掛かりが全くない。
管理局は捜査を続けることは時間と経費の無駄として、数か月で捜査を放棄したという。

それにしても、たった一度の過去改変で…次元空間全域に及ぶタイムディストーションを起こすことなど考えられない。
しかも、矛盾…タイムパラドックスのない過去改変など、どう考えても不可能なはずだ。
まさかあらゆる時代の因果律を改竄したとでも言うのか？
有り得ない、こんなことが起こるはずなんて…！

実を言うと、原因には一つだけ心当たりがある。
なのは達と出会うまで意識していなかった、奇跡を起こす存在…マギカ式魔導師、一般名称『魔法少女』。
…地球以外にも、多くの魔法少女や魔獣がいるという。
それらのいずれかが、膨大な因果をため込んだとすると…全てに納得がいくんだ。
管理局も捜査を放棄する際、このような結論を半ば無理やり出したらしいが…

「クロノー？何考え込んでいるの、まさかまた例の…」

「あ、申し訳ありません母さん、今行きます」

＝＝＝

危険な賭け。
クロノくん達の援護が来るまで、二人だけで耐えられるかどうか。
それに、一人で脱出するフェイトちゃんが…無事に出られるか。

「…分かった。なのは、はやて…頑張ってね」

フェイトちゃんの声で、覚悟を決める。

「それには及ばないわ」

聞き慣れない少女の声。ちょっと年上…？

一瞬遅れて、視界を無数の光の筋が満たした！
残らず倒れる魔獣達。これは、まさか…

「魔法少女！？どうしてここに…」

「どうしてって、魔獣がいるからに決まってるじゃないか。それはそうと、久しぶりだね…なのは、フェイト」

「…キュゥべえ！？」

現れたのは…キュゥべえ！何だか本当に久しぶり。

彼を肩に乗せているのは、長い黒髪に赤いリボンをした…宵闇を思わせる雰囲気の魔法少女。
感情をあまり出さないような感じ。

「瘴気が濃いから来てみたはいいけど、魔獣を従えた存在がいることは予想外だったわ。
…あなたたちが『時空管理局』とやらね。苦戦しているみたいだけど、手を貸してもいいかしら？」

「あ、ありがとうございます！よろしくお願いしますっ！」

…次元犯罪者を追う時に魔法少女と共闘することは時々あるけど、大体あっちが足手まといだったりする。
わたしたちのピンチを救ってくれるような強い子は初めて。
でも、これで何とか体勢は整った！

「…追加の魔獣が届いたみたいだよ」

キュゥべえが向いた方を見ると、また新しい魔獣がたくさんやってきた！
さっきの倍以上の数…！

「分かったわ。ここは私に任せて大本を叩いてくれないかしら。
あなたたちの専門分野でしょう？」

そう言って、黒い弓に光の矢をつがえる魔法少女。

「…はいっ！！」

超強力な魔法少女という心強いサポートを得たわたしたち！

後は、犯罪者その人を叩くだけ！

というわけにもいかず、犯罪者さんの部屋の周りにも魔獣が配置されてました…。

私たちを見つけるやいなや、物凄い数のレーザーで迎撃してくる魔獣！

これじゃあ、さっきまでと同じ展開なのー！

「くっ、こうなったら…強行突破しかないっっ！」

魔獣達の死角に移動して、力をためるフェイトちゃん。

…はやてちゃんは気付いていないけど、わたしは見た。

一匹の魔獣が、フェイトちゃんに狙いを定めている光景を…！

「あぶなあああああああい！！」

だめ、間に合わない…！

次の瞬間には、横に斬られて真っ二つになった魔獣達がいた。

…一匹残らず上半身と下半身が綺麗に分かれていたの！

これ、フェイトちゃんがやったの？

「まったく、管理局の魔導師が聞いてあきれるわ！」
この声…、まさか！
「ア…アリサちゃん！？」
そこにいたのは、どう考えてもアリサちゃん。
騎士を思わせる服装に、炎をまとった日本刀！
「まさか…アリサちゃんも、魔法少女…！？」
腰を抜かすはやてちゃん。
「…そ。あんたたちが前に教えてくれた魔法ってのとは違うけどね」
…闇の書事件の後、わたしたちは家族と友達に魔法の事を打ち明けていたの。
でも、それは…これから管理局の魔導師として忙しくなるから最低限の事を話したわけで…
魔法少女の事は、話してない。
「とりあえず、今はさっさと敵を始末するわよ！」
そうだった、いつまでも混乱してるわけにはいかない！
魔法少女として強くなったアリサちゃん、そしてあの黒い魔法少女さんもついてるんだ！
五人いれば…負ける気なんてしない！！

結局、あっさりと逮捕しちゃった。
犯罪者さんを追い詰めてからも、あいつはそれまで以上の数の魔獣を襲わせてきたけど…
その魔獣は、アリサちゃんと黒い魔法少女の人…『暁美ほむら』さん。この二人が残らず片づけてくれたの！
どうやら二人はチームを組んでいるみたいで、多くの魔獣を倒してきたとか。

「そういえばキュゥべえに聞いたわよ。あんた達も契約したことがあるってね」

…はやてちゃんは違うけどね。
わたしたちだって、今は契約を破棄している。ミッド式やベルカ式とマギカ式は物凄く相性が悪くて、併用することはできないんだとか…

「うぅ…話についていけへん…」

あはは…、ごめんねはやてちゃん。

「そんなことよりさ、すずかが面白い本見つけたって言っててね…」

こんな感じでしばらく五人で談笑。
その後、アリサちゃんは家に帰ったんだけど…

「時空管理局の魔導師さん…我儘なんだけれど、管理局にひとつ頼みがあるわ」

暁美さんが、何やら真剣な表情でお願いしてきた。

「えーと…とりあえず聞かせてくれますか？」

「ありがとう…じゃあ、これを」

そう言うと、暁美さんはおもむろに一冊の本を取り出す。
これ…さっきアリサちゃんが言ってた、すずかちゃんが面白いって言っていた本だ！

「これを…魔法少女のいるあらゆる世界で出版してくれないかしら」

出版って、まさかこの人…この本の著者さん？

「…助けていただいた恩もありますし、一応相談してみます。
ところで、この本ってどんなお話なんですか？」

今までずっと無表情だった暁美さんだけど、この時一瞬だけ微笑んだ気がしました…

「…世界を救った、一人の魔法少女の話よ」

――完――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5215v/

魔法少女なのは☆マギカ　～希望の魔法～

2011年8月5日16時04分発行